

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和五十年五月二十五日 印刷
 昭和五十年六月一日発行 (毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通卷五七七号



日川協加盟

No. 577

六月号

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

川柳塔社同人255名参加、

同人句集 『川 柳 塔』

頒 価 1500円 送料 160円



アベノ近鉄・TEL 621-1231



上本町近鉄・TEL 779-1231



奈良近鉄・TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈 良

 **近鉄**

夢が広がるショッピング
近鉄がお届けします



ヤングのための
カジュアルウェア

クラブウ Kurabo Fabrics
カジュアルウェア

倉敷紡績株式会社



中島生々庵

雀の子可憐な自負で飛び出した

長男次男あとが続かぬ鯉職

筋書は顧問という役待って居り

嘘は言えずさりとて化石にもなれず

謹んで玉青先生にささぐ

輪廻の綾はるけく尊く遅しく

得 度

本誌で長いお馴染めもあるし、私自身10数年に亘り師事している直原玉青先生が、このたび得度をうけ法名を頂かれた機会に、得度という言葉を勉強したいと思った。若い頃から屢々耳にする言葉ではあったが、結局判ったような判らぬような言葉でもあった。辞典などで調べて見ても、剃髪して戒法をうけ、出家して仏道に入ることと形式的な教えだけである。たまたま大法輪4月号で松原泰道師のお話を承って、おぼろげながらも輪廓が出

来たように思えて来た。即ち『得度の度は渡と同意語で、迷いの流れを自分も渡り他者を渡したいとの誓いと願ひ。自分も安らぎ他者をも安らぐようにという意味の完成を誓い願ひのが度であり、その度の尊さを身につけるのが得である。又『人生の渡し守』の誓願を心に持ち、自分は渡らずとも他を渡そうと心身を細く砕くなら、それも意味深い得度である』とあった。世の中のすべての道の先達がとくと味わうべき言葉であると思う。

川柳塔六月号

川柳塔六月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

座右の句

進む時計 遅れる時計夫婦かな

(薫風)

私の句

吹けば飛ぶいのちの今日を長らえる

羽原 静歩

得度

時間と距離

誹風柳多留廿五篇研究

(六)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔(同人作品)

水煙抄

麻生路郎物語

(6)

「直原玉青画伯」の近況

秀句鑑賞

(同人吟)

川柳の出る幕

近作

百人一首と川柳(12)

中島生々庵

(1)

川村好郎

(2)

西尾 栄選

(4)

菊沢小松園選

(30)

東野大八

(22)

中島生々庵

(28)

尼緑之助

(37)

高杉鬼遊

(45)

戸田古方

(42)

富士野鞍馬

(38)

時間と距離

川村好郎

過日、若本多久志氏より「続揭示訓」という書物を送って頂いた。これは多久志氏が職場教育の一端として職場の掲示板に書きつけられたものなどをまとめて筆にされたもので、尼崎日産自動車株式会社創業三十周年記念事業の一つとして同社から発行されたのである。その一言一句は決して社員の方々の人生指針だけでなく私たちも座右の銘として熟読すべきものだと思わされたのである。その中に次の一節が私の心を強くとらえた。

一步下って見る

秋の山や郊外へ出ると、そこここカンパスを立てて写生をしている人の姿を見かける。ところがじっと見てみると、どの人も一心不乱に描いている時間より、一、二歩下ってカンパスと風景を見比べては考えている時間の方が長いことに気づくのである。これは一步下って見る、という描画の教理で、われ

愛染帖

橘高薫風選

(40)

永宗宗義逝く

浜田久米雄

(46)

ざっぴつ春秋

不二田一三夫

(43)

一分間の柳論

関 美子・大路美幸・福浦勝晴・鈴木村諷子

(53)

雅号ぶっちゃけばなし

八木摩天郎
鈴木村諷子

(58)

初歩教室

大路美幸
藤村メ女

(59)

大萬川柳「裏」

本田恵二郎

(50)

柳界展望

川村好郎選

(52)

本社五月句会

(庸佑・整理)

(54)

各地柳壇(佳句地10選)

斎藤三十四選
浜田久米雄

(61)

「環 境」
一路集

山川阿茶選
弘津柳慶選

(48)

「目減り」

(三夫・葉子)

(65)

編集後記

座右の句

足跡を残そう砂のある限り

私の句

雨滴すら刹那を光る欲をもち

(恵二朗)

嘉数千代香

われ企業に働く者も、常に物を正しく見るためには、距離と時間をかけることを忘れてはならないと思う。

現代人は気短かになり、余りにも自己主張が強いために、どれだけ争いや悲劇を生んでいることだろう。距離と時間をかけ、一歩下つてものを正しく見ることを忘れていた。

私たち作句する上に於てもこの事を忘れてはならない。旅行で景色に魅せられその場で作った句、悲喜に感泣し直ちに作った句は往々にして自分だけ感激して凡作になり易く、時間をおいて静かに作句してこそ人の心を打つ句が生れる。苦勞して作句したものは捨てがたく、又その句が没になると選者に眼がなると自惚れるものだが数日を経てその句を見た時やはり没になったことがうなずかれるものである。一歩下つて距離をおいてながめるからである。

川柳は一歩下つて世相を、人生をながめ批判することを教えてくれる。川柳は感情に走らず真実を発見する事に役立つものである。そうあるべく川柳に取組むべきであろう。



西尾 榮選

大阪市 神谷凡九郎

万物の霊長なんて云うから狂るうんサ
欠陥動物やから人間死を嫌う

無責任に生きて神様仏様

けれどもけれども地球ストはしない

言葉があつて人間不倖せ

四季と云う評価へ太陽が笑う

泉佐野市 阿萬萬的

第六回日展を見て

曠原のいのちにも似て川白く

島椿 すき間を海の色でうめ

素焼乾すまるみも春の陽となりて

波は小説波は音楽青い色

奈良寸景

菜の花の色で大和路よみがえる

雨空に古塔はにじむ色で暮れ

八尾市 宮西弥生

敗北の帰路に蹴飛ばす石がない

美しい世渡りの向うに見える虹

ときめきを覚えた女の花日記

未知数を駆すぎ平行見失い

ある別れ明日を埋める文字がない

曙を待たずに花 価値ある死

尼崎市 黒川紫香

たら子またひとりぼっちの火ではねる

バス降りて見たい桜の峠道

杉木立の影でひっそり滝落ちる

遍路まだ若く秩父の山白く

長瀬の深き流れに山揺るる

奥秩父休みの宿で泊めてくれ

大阪市 不二田一三夫

「明日」というヤツに会いたくて今日を生き

何かが起こりそう 何かが起きていた新聞

小っぱけなネジにもなれぬ身をかこつ

O型同士の父母へ血液腑に落ちず

「僕」という土工のひとり歯が白い

寄席

関西旅行 花月・角座のスケジュール

島根県 堀江芳子

(九カ月振りの退院)

迎えもどかしもどかし退院の

迎えてくれた夫の方が落ちつかず

いのち満つ春を子に酌ぎ夫に酌ぎ

手のかかるおひとで口論すぐに消え

母の重さ妻の重さよ桜咲く

鍼師の妻で絶やさぬサロンパス

豊中市 戸田古方

旅の句(一)

秋芳洞

蝙蝠よあんたがこの先住者

地下水の穿つ姿は見せねども

萩

百年も畳廊下を拭き清め

山口

雪舟のお庭へ簾が迷い込み

津和野

欲すてた顔で鯉主手を叩き

形振りを捨てて津和野史は平和

倉敷市 小野克枝

囲まれている幸せに桜降る

方言を丸きり出せる友が居て

父と娘の谷間で母は振り子になる
恋人をかばう一人前の顔
ここ掘れと云わぬ愛犬飼っている
磨き上げたくて心に窓を置く

堺市 河股緑水

人ごとでない倒産を聞いている

この家を他人に譲る日の施錠

来ることもあるまい街が遠ざかる

明日からの禁酒の酒に酔うている

雨受けた一葉一葉の輝きよ

大阪市 吉田圭井堂

うとまれて早寝の夢は愚痴ばかり

孫にすれば借景程度に見える祖父

無駄遣いを責めれば国を真似ただけ

一本のおしきせ肝臓に邪魔される

喜寿近し竹馬の友もあと二、三

泉大津市 村上春巳

駅弁が食べたいと思ひ旅に出る

釜ヶ崎派手に目刺の嗅いさせ

医師と子を七分三分に親子

鹿せんべいちよっぴり恐い顔でやり

親子鹿花の人出を掻き分けて

大阪市 阪上十止庵

過去捨てに行くひともある始発バス

かんがえる甘さを夜だから許す

ふるさとの味をテキスト甘くする
子の夢がある日他人の顔でよく
老いらくのかぶりペンを持つばかり

岸和田市 植山武助

試験済む子へ伊豆の百恵が待ってくれ
年甲斐もないがうれしい鶴が折れ
成長の課程と失敗許される
同窓会今年も級長さんは来ず
裕福な子が裕福な子へ贈る

新宮市 大矢十郎

老夫婦訪えば昨夜のビデオめき
鼠にも好かれ近所の子に好かれ
鼻もちならぬ五十の現代語
うっかりと樺太も書く日本地図
ふた皮目剥けば恐ろしい選挙

西宮市 島居百酒

職安で慰めあえる友が出来
レイオフに子はめでたくも進学し
手帳繰って誘いを逃げる嘘をつき
児が作る埴輪 埴輪になっており
無関心らしく見せてる嫁きおくれ

倉敷市 能登原白水

花咲いて太古に続く春霞
断行の日々が未来を予約する
人格が匂う礼儀の中にいる

知恵芽吹く園児園児を目で撫でる
世を守る裏方さんとして生きる

三重県 川上大輪

アイシャドウ泣かぬ女にしてしま
光るものみな光らせて妻の城
言い出せぬ言葉の端に絡む義理
迷ってる心へ自動ドアが開き
パチンコの球追う遊びでない目つき

和歌山市 沢山福水

山の氣に触れて心が白くなる
筋書きも私の過去に似た芝居
乾物になっても河豚はうたぐられ
一隅を照らす心の眼を開き
倅せを活ける花瓶が白過ぎる

兵庫県 遠山可住

転勤

栄転を海外なみに見送られ
転勤へ妻の案じる癖を持ち
転勤の荷物へまじり込む秘密
二日酔いのまま着任の御挨拶
饞別へ我が足跡をふりかえる

八尾市 高杉鬼遊

川を見る流れるものは過去ばかり
二三輪咲いた桜が喜こばれ
子に見せる顔は鬼面を外さねば

背伸びするアヒルは鶴の面を借り
ハンカチの白さへ負けたなと思う

神戸市 小浜牧人

春風と柳は愛の戯れか

月おぼろちよつと瞞されてもみだし

春眠の遠くで朝のオルゴール

逢いに行く着物に迷う通り雨

栄転は噂に終りさくら散る

倉敷市 水粉千翁

満ち足りて半人前をかみしめる

手を握る雨後曇晴れの顔

おごそかに新芽巨木へ呼吸する

高うして裾なだらかに山黙す

蕾から花はずかしき彩を振り

東大阪市 落合思月

背信を許す心になっていた

私の鍵まかせる相手見付からず

影法師よりも素直な妻であり

思惑の違いを秘めて手をにぎり

里帰えり私の席のない実家

女まだ見つめてほしい髪を染め

この女も裏地に紅をまだ残し

折込みの今日も無縁のハウジング

せまき門くぐってコネにあなどられ

大阪市 本多柳志

老いらくの恋に耐えてるコップ酒

堺市 高橋千万里

カレンダー破るに惜しい今日の日を

群集にこずかれ夢がこわれそう

ヒルの酒夜のムードの地下がある

感情をしまい込んでる老眼鏡

たのまれた孫もてあます小半日

高槻市 若柳潮花

転宅へ挨拶ひとつせぬ団地

お手頃やなぞと仲人馬鹿にして

先妻の遺品再婚気にかけてず

揚幕の音 助六の傘が出る

雪と桜 和服の裾も京の女

大阪市 津守柳信

役立った傘も話題の山陰路

春雨が緑濃くする松江城

交たいで話す電話も旅の夜

卓球で乙女にかえた宿浴衣

もうかりまっか誰も聞かない大砂丘

氷見市 関美子

千羽づる愛たたみ込みたたみ込み

目覚し代りのキス レタス色の朝に

舌剣かわすこわれそうなほほえみで

未練よぶ雨のつぶやき雨は字余り

冷凍魚の目 虚無の世界を凝視する

富田林市 岩田美代

心外を黙す羊かん口に入れ
街角で真実拾うた四月馬鹿
畳紙に弾み深まる花便り
五枚こはぜ楽しい疲れつまってる
雨の春乾かぬ記憶が美しい

西宮市 若林草右

定年がどこかの釘を一つ抜き
安普請 押していかなきゃ引く雨戸
意地悪は当選をまって逮捕状
仏縁は命日にした花祭
仏壇の母の写真も仏顔

京都市 都倉求芽

ええほうを欲しがるように値を刻み
子の背丈遺伝蹴とばす育ちよう
良いもしいや悪いもしいやに踏み切れず
気が弱いおかげで穴にも落ちず済み
新緑をあつめて塔が空へ抜け

兵庫県 小西無鬼

甥も姪も結婚

とこしえの愛を契った手は堅し
新築へ妻を迎えた幸を知る
絶え間なき祝辞へ御馳走忘れられ
年嵩で座持ちのスピーチ指名され
アドバイス矢張りよかった祝い酒

和歌山市 吉野富江

桜散る様をうらやむ桃の性
寝ころんで思案の窓に春一番
涙線がこわれたような老いの坂
対話無き暮しに耐える夫婦箸
夜桜について詣りの紀三井寺

岸和田市 高橋操子

市長賞受ける市長と同じ歳
歩くところないよと旅をすすめられ
温泉から家が恋しい便り書く
春のおごり地図をたよって来た料理
ああ古城さくらふぶきのひとしきり

宝塚市 傍島静馬

おじいちゃん骨ばっかりやと肩たたき
好かんタコ云うてた彼と結ばれる
洗濯機操作教えて手伝わせ
写真屋に赤ン坊補正の余地がない
有給休暇クビの前ぶれかも知れず

島根県 堀江正朗

九カ月振りに妻退院

妻帰る独りぼっちよさようなら
春たのし妻がいてこそ僕の春
妻の手の温みで爪をまるく切り
女房に頼りにされて叱られて
倅せは眠る布団のぬくみから

島根県 錦 織 文 子

嫁と摘む蓬のかおり和らかく
花いっぱい故里包むように咲き
思い出が生きてて虫干はかどらず
人並に生きてて欲しい車椅子
死を急ぐ事件またあり花の春

和歌山市 野村 太茂津

文学論肩肘張っても詩う幸
足跡を股ぐ息子はためらわず
盆栽に育てず鉢は手の中に
鶯の一声初夏にも舌足らず
言い切った嘘に酔うとき砂を噛み

岡山県 竹 内 翁 童

職人の誇り小さな銘に生き
妻の死を作家昇華して稼ぎ
人間の弱さ取りまきにひきずられ
酔うたふりしてうつ憤の背負い投げ
給料日妻は両手で受けてくれ

青森市 工 藤 甲 吉

百姓を昭和幕府も苦しめる
人民は弱し受付でも叱られる
今の世にピーポほどのありがたさ
怨憎も越して思い出なつかしく
男とは無理に男になりたがり

東京都 山 根 白 星

点眼の顔はゆっくり戻すもの
貧農の伴と出世して言える
生きよとも死ねとも言わぬ夜の鉄路
屈辱は拇印の指を押さえられ
ピンカール阿漕な昼の顔である

松江市 中 川 晃 男

わが娘九州に結婚す

花嫁の涙ふく手を押さえられ
色直し 着せ更え人形のように見せ
花婿へもう甘えてる眼をつかい
花開く わが娘へ遠く妻とわれ
花嫁人形 筑紫平野は花ざかり

竹原市 山 内 静 水

短大出の英語へ社長むきになり
末座から異議あり心ととのえる
切り詰める暮しの中に「主婦の友」
五十九に職あり妻に見送られ
お若いと言われ残り火燃さんか

竹原市 三 宅 不 朽

粥を炊く男の髭が立派すぎ
樹々芽吹く枯葉のごとき寮のパン
熊野灘母を借景に得ておおら
ハンターの無視へ鴉鳴いてみせ
搾取されっぱなしで四十の呟呻かな

大阪市 小 出 智 子

中年のたしかさで知る夫婦愛
脱皮して蝶になるとは限らない
誘惑に負けた自嘲の石を蹴る
自惚れを許さぬ鏡と向い合う
友達の目が同性の目になり

大阪市 河野君子

話題満ちたして華麗にもえている女
派手に着て鏡に齡を当てられた
春の海のささやき私を離さない
いたずらな風も又よし花吹雪
ジンフィーズ甘い想いをかき立てる

神戸市 中村ゆきを

退院の桜小径に海が見え
夕桜二人の肩も冷えはじめ
一斉にあいさつの声新入社
出張をしているはずの人に逢い
レイ・オフがそこまできてる昼休み

八尾市 香川酔々

愉快な鬼たち

狭き門くぐって笑う鬼となり
地酒呑む鬼のことばは国なまり
くには何処鬼は嗤って答えない
赤鬼のつのが折れます四月馬鹿
ベレー帽似合う鬼です春おぼろ

香川県 三井酔夢

喧噪の巷逃れた春へんろ
いたどりはこうして食べる幼子よ
球根はムスカリだった過去のひと
四月馬鹿焦がれて死ぬとTELしよう
増築をのばす牡丹が終るまで

富田林市 板尾岳人

華麗なる汗に梅雨空晴れていた
大声で喋べると山の峰笑う
寝ころんで山背負う重さかな
六月の山は下から濡れてくる
吊橋がゆれて真ん中濡れていた

鳥取県 鈴木村諷子

持たすものない桃の枝摘んでやり
真実を語れど人の寄って来ず
浴槽で孫がおいどを蹴り上げる
東京の子は東京に帰っちゃい

大阪市 大坂形水

女の子にカバンを持たし漫画だね
スリッパのままエレベーターまで送り
診察の順番札にコネ混る
親と子の断絶他人ごとでない

鳥取市 河村日満

緑之助氏のご長男を悼む

子を先に召さるる神のみ心か
ふと死んでいぬかと病妻の額に掌

地球儀をくるりと裏の国親し
春の陽へ蠅も動きをとり戻し

和歌山市

津田与史

孫来れば妻若々しい声となり
失敗の連続自嘲では済まず
気がつけばみんな勝手な事を云い
過疎の村荒壁にある迷い

呉市

楨田英詩

お上手と知らず善人ついてゆき
清貧に漸やくなれて主婦の位置
妻の顔夫へ姑へ七変化
お見合いで写真と違う人にあい

岡山市

出原敬一

独り旅酒で消したい愛だった
新天地もとめ筈の外
思い出のひとつ十九の紺がすり
消火液無効わが家の幸とする

大阪市

山川阿茶

アルバイト今日は共産党へ行き
三振の顔をアップにとられたり
電車から造幣局のさくら見る
影うすい文字の一つに義理があり

東大阪市

久米奈良子

春蘭をわけし隣りも花を持ち
散華舞う写経へ永遠の祈りこめ

いたわりの言葉へ受賞瞳がうるみ

いかるがの里・法輪寺

早春へ心の塔は聳えたち

生駒市

草深醉升

老齡相憐むか席を譲り合い
コチコチの信心神様もてあまし
信心をしても見栄がつきまとい
儲けにもならぬ多忙を嬉しがり

神戸市

仲 どんたく

浮世絵展にて

浮世絵の頃の浪花は水が澄み
化けるって楽しいことよ三面鏡
ベーパーを小脇にかかえブーツ行く
病室を去る時老いの眼と出合い

倉敷市

松下梁水

亀なりの歩巾で越える幾山河
逆算をしたら小さな僕だった
善人にまた直球で勝負され
焦せるほど四十の坂の勇み足

岸和田市

葛城伊三郎

日本の思想を変えたきのこ雲
心には触れず節操聞いており
生前を詫びて石碑に水をかけ
一万円札も小銭のようになり

倉敷市

野田素身郎

新築へベットあっさり捨てられる

両隣から内職留守を頼まれる

手内職今年も桜見ずじまい

着物 帯 草履貸し合う三姉妹

出雲市 原 独 仙

髭剃って己惚れ鏡笑ってる

札束へひらめく一瞬見震いす

老妻も薄く紅塗る芽出度い日

複雑な気持ち老人会へ入り

藤井寺市 児島与呂志

待ちかねた妻の喋りをフンフン

母の背がまた一と廻りちそうなり

大日如来像の影背負う夜

母叱る声が泣いてて親と子と

守口市 羽 原 静 歩

女医さんの婚期は知って知らぬふり

春うらら回転椅子は不在なり

たっぷり黒髪洗う花曇り

冷凍のえびにも似たり寝台車

倉敷市 藤 井 春 日

養老院ここが私のユートピア

頭髮の黒い長官期待され

現実が誓詞にそむいた日々であり

人を恋う心を鏡知っていた

和歌山市 小川佐知子

やけどすること判ってる火をいじり

春風に酔えり生きとし生けるもの

引きがねを引くまい夫も耐えている

飢え知らず育ち幸せ知らずいる

大洲市 堀 内 暁 風

賭けてない時は賭けごと冴える勘

凡人でいい満足してる我れ

退職へ喜ぶ人と惜む人

顔負けを聞くお話も酒の席

大阪市 室 谷 徹 舟

花の下しばし忘れる不況風

合格をした顔活気甦る

受験期が過ぎて神様ひと休み

国立へ心の紐もゆるみかけ

鳥取県 清 水 一 保

人類を滅ぼす人類馬鹿なるか

無い智恵をしぼって耐える智恵もつき

目的こそ違え草木に有る春闘

明日を生く糧に心の句誌を読む

伊丹市 小川 静 観 堂

雨のち晴れ人生はこんなもの

お隣りの中年の寡婦の後ろ襟

観音さまもご存知ならん旧約聖書

ドラマ「花の生涯」

志士の首ならんだところで夢がさめ

倉敷市 稲田豊作

後入りの支えへソクリ追加する
万座の目浴びて正義が縮こまり
胃カメラを八回嚥んだよ が自慢
二次会は大言壮語の酒に酔い

榎原市 岩井本蔭棒

青筋にまだあと味が疼いてる
上役の娘も貰う宮仕え

大阪で訛り同士が恋をする
花も木も倅せそうな医者者の庭

尼崎市 高津徹也

春先になおらぬ赤ぎれふと得意
焼くことが一番きれいだの
つつましい倅せのリズム借りに来る
湖が二人の愛に利用され

小松市 馬場魚山

合作の苦勞を内助口にせず
入院の日から指折る気のあせり
退院へ主治医は偉い人に見え
人生のドラマ始まるランドセル

大阪市 西出一栄

二分咲きでよかったうべの春あらし
嫁 姑 仲が良すぎて娘に妬かれ
病むつらさ知らず後生業な人にされ
薄端の床より出ずる術知らず

鳥取市 両川洋々

組み立てた嘘をそばから子が崩し
保護色に染って正論もう吐かず
停戦を死の商人がはがゆがり
偽善者の涙横向く間にかわき

八尾市 大路美幸

当選の笑顔に思想見つからぬ
花びらを両手に受ける少女の舞
手さぐりの父の憶病噉えない
一杯のコーヒー 小さな旅がある

名古屋 吉田水車

母と子と初心にかえる入学式
自動販売機たまには舌を出し給え
涙をすすって終るラーメン
勝負とは別にミカンの皮をむき

大阪市 江城修史

史好氏三月二十八日退院一句
早ばやと春の訪れ友は癒え
名門のかくも重たい荷を背負い
花疲れこんなに昼をねむらせる
老ゆる師の愛とはかくも温いもの

大阪市 島田雄峯

全力で愛されたくてすねて見る
くどくどと云うて味方を又へらし
男女 女男と 花吹雪

這えば立て立てば一流校とは悲し

岡山県 直原 七面山

殺陣師とは見えぬ殺陣師の優しい目

三才でもう媚を売る女の子

伝説の島を訪ねて寝付かれず

正直を通して裏切り者にされ

八尾市 高橋 夕花

粧うて花の素顔に目を伏せる

春愁の胸にひととき遠い人

姫鏡四十の顔を拒絶する

極楽のまわりさまよう不眠症

大阪市 川口 弘生

御好意に甘えきれない貧の意地

今日からは自分の足音立てようか

よかったと自己満足かも知れず

よせと云う言葉が出ない気の弱り

倉吉市 奥谷 弘朗

几帳面だけが取得で小役人

困ったらシベリヤ捕虜を想い出し

甘いから食べと半分くれる妻

ことなかれ主義に消された新鮮味

守口市 野呂 右近

限られた生命の中で燃える花

たたら踏みやっと堪えた勇み足

ひねくれた木も使いよう床柱

老眼鏡拭いて見直すよい頼り

大阪市 中川 滋雀

溝一つ埋める手だてに迷いぬき

回転の早さは笑顔にすりかえる

マツチする間合いに顔色読んでくる

花冷えの歩巾に忍びよる孤独

鳥取市 加藤 貞山

小豆島遍路行

山門を入れば桜の極楽寺

行摺りに言葉掛合う遍路さん

鶯につられ口笛吹いて行く

結願の家が恋しい朝が明け

笠岡市 松本 忠三

毒舌を叩いた奴に同調し

父さんに聞いてからとは無責任

木の芽立ちですと妻は馬鹿にする

返済は何時でもいいと催促し

柏原市 大峠 可動

労働の汗太陽に似て眩し

一線を引けば救いのない仮面

凡人のドラマ砂漠の拒否に遇う

流れ矢となって絶叫する命

大阪市 黒田 真砂

集合の足元寒さ這い上り

城崎

しんしんと冷えて城崎春の雪

醍醐三宝院庭園

三宝院の庭に彩そえ藤戸石
強がりは言っても矢張り母のひざ

岸和田市 福浦勝晴

旅に出て独り風との対話

魚河岸の喧嘩で江戸の幕ひらく
人生は定年からサと手弁当
蜘蛛の巣を視つめて何を考える

笠岡市 出原真奇

外孫の少し馴ればすぐ帰る
時々が度々となる酒でもめ
一年を待たした桜を雨たたく
額の父 母も泣かした顔であり

和歌山市 若宮武雄

空襲のやみの桜が白かった
善人の顔をして花をはめている
春と知る花の命の焦りよう
華かな牡丹崩れて湧く無常

東大阪市 本多清人

団結の氣勢は拳で天を突き
発展を支える石に甘んじる
団結へ私自身はひっ込める
発展はケール上下の本支店

和歌山市 内芝としよ

偲んではいたらなかった事を詫び
古びても想い出あらたな博多帯
甘えてる夢見て淋しい朝となる
好きな人見えたか明るい声がする

竹原市 森井菁居

ひとときの天下を取らず夕桜
もうあきまへん女が酌げば飲み
自覚症状へ内科の戸がきしむ
身内だけ叱ってくれるコップ酒

平田市 久家代仕男

四才の姪急死

人形を抱かせて弥陀の旅仕度
流し雛ほとけにかえる日を信じ
地方選連呼へ団地窓を閉じ
菜の花が匂い幼なき夢続く

兵庫県 河原みのる

あめつちへ四〇キロを還すのみ
テレビガス電気こまめに消し回り
横書きの離婚届にハンを押し

鳩子完結

結城紬えにしのよりが戻りかけ

松山市 谷のぶお

善人の嘘はほんとにしてくれず
孫の手で背掻きながら指図する
頂上へ登って祈る事があり

若草に放尿慌てゐることはない

堺市 山本素郎

お菓子くれた人を見い見い泣きやまず

いにしえや樹下石上は雨の彩

合掌の雑念しきりなりいとこの計

避妊薬げに世の中はままならず

岡山市 光好陽子

割り込んで来たのが話を横取りし

職業らん無職と書いてわびしけれ

ほんとうの姿みつけたかたみ分け

真実と嘘を見抜ける年になり

松原市 玉置重人

炬ばた焼今日のヤマコを悔いでいる

パーフェクト土壇場にある落し穴

ダルマの目入れたら仮面すり落ちる

男ある日時限爆弾抱いてみる

枚方市 宮川珠笑

春一番迎えるガラス戸のリズム

名刹の木魚に万象動く春

空を這う白蛇に似たる飛行雲

父の忌が縁者集めてくれた春

岡山市 嘉数千代香

健康な体がみたいレントゲン

弁解の語を組み立てる刻ひとり

停年のない母の座で子をみつめ

崩れてはならぬ積木の私語を聞く

島根県 小砂白汀

イメージのまるで違った包装紙

打鉄音そんなに焦るではないぞ

風化す春の衿あしちらつかせ

飢えならん春の雨さえせつなくて

愛媛県 渡辺曉童

自せんの役が その他大ぜい

山吹の黄に 陽も黄金色

休耕田に 花の咲く草

墓地にも春の 気配濃厚

竹原市 時広一路

幾何学的な塀割り切った人が住み

一に一足さずに掛けたから増えず

加害者の方が人権言いたてる

七曲り越せば舗装の道が開け

桜井市 岩本雀踊子

うまい事妻が呆けるゼニの事

定期券小さな不満持っている

眼帯へ四月の太陽はね返えり

花道の背に妻子の拍手なる

今治市 原田一風

何度目のさよならでしょう春の雨

殻だけで身の無い蟹に似てる俺

春の宵ビール残ってたなと思ひ

老妻に二言聞けば嘴みつかれ

諫早市 原田明春

居眠りに見せて突っ込む期をねらい

山川草木ここへ住むには田舎すぎ

コンタクトレンズはずしてから泣き直し

転動を酒屋にだけは惜しがられ

大阪市 西川誓二

歴史が積み重って重要文化財

親の反対を叔父貴にすがりつき

戦争煽っとして何の孤児救済ぞ

自分の一票も府市政に跳ね返る

東大阪市 竹中綾女

雨上り湖面に水鳥見え初め

桜咲く札所めぐりの足輕し

民芸の湯呑のぬくみ手にやさし

留守番の夫へ食べさせたい蜆汁

東大阪市 竹中肖二

窮めれば素朴に帰える芸の道

六段の調べに乗って桜散る

弛緩した頭が重い花曇り

由緒ある寺が埋もるビル谷間

松江市 小林孤呂二

次々と課長の椅子を追いかされ

地球に住み春は動くものばかり

やわらかい声で倅せ満る日々

嫁ぐ日へただ黙っているだけの父

宇部市 平田実男

口下手の一言流れを変えている

長島の負けても絵になる記事になる

長女高校入学

制服がなんとか格好つけてくれ

同い年が老眼買うた淋みしい日

松江市 恒松町紅

夜桜へ平和な唄がはね返り

早退をする気末座へ来て座り

スケジュールどおり団交幕が下り

秒針の聞え不安が増す夜更け

松江市 柳楽鶴丸

高根の花所詮は男心で開く

絵の稽古妻はモデルで座らされ

植物から動物に進む性教育

晩酌へ男対女で差向い

京都市 松川杜的

洛東永観堂拝観

悲田梅人を助けた色で咲き

「ぬけ雀」も一度数を読みなおし

松の間の松の緑にある心

臥竜の廊下の曲りへ桜散って来る

岡山市 横山一声

秀才とは別に上手な金もうけ

何が氣に召さぬか二度も返事をし

あの時がチャンスだったと後で悔い

一方通行とタクシー遠廻り

大阪市 宮尾 あいき

花散らす雨は男の性に似て

折角の亡夫にすねて夢がさめ

息子二十才背中かけとも云えず

姪の結婚祝うて

親孝行も二倍今日からは二人

大阪市 柳 原 静 香

春の精夫婦に手などつながせる

義理で書く一票の字が乱れ

春や憂し娘の友達はみな嫁ぎ

耳のない暮しに耐えて耐えられて

大阪市 金 井 文 秋

老人会と云うイメージが氣に入らず

出来るなら連記をしたい投票紙

焦点に立ちうぬばれも満足す

毒舌が友を失なう程も効き

藤井寺市 西 いわを

風光る燕抜いたり抜かれたり

木蓮の白 傷心を慰める

鶯を啼かせているはテープです

ひしめいて無縁仏の墓じるし

富田林市 和田 維 久 子

吉野吟行(二句)

たわむれにしては桜の散り急ぐ

如意輪寺花の歴史をくり返す

母と子の対話たのしい迎え傘

美しき犠牲となって母老いぬ

宿毛市 山 本 窓 花

遣されたひなへ涙の春の宵

道草の嘘がポケットからこぼれ

運命の合鍵一つの重さもつ

仲人にアパートまでも世話になり

美祿市 安 平 次 弘 道

仮面ぬぐ女のすきに愛がさめ

欠点を他人が云うと腹がたち

栄養士と板前意見すれ違い

高度成長終りローンは残り

堺市 藤 井 一 二 三

柳友村井城南氏逝く

極楽を祈りかなしい掌を合わせ

きたぐにの春を待たずに散りいそぎ

儚さを花の吉野に来て悟り

別々の夢みる枕揃え寝る

大阪市 藤 田 頂 留 子

去年よりましかと燕宙返り

国道今日十五日というラッシュ

近道をとれば道路工事中

高槻市 福田丁路

春なれや孫のお洒落に目を細め
公害を知らぬ深山の分教場

真夜中のお巡りさんの息が凍て

姫路市 梅谿庵不酔

春景色 汽車も落書きして走り
塩焼に されて海老は腰のばし
アアそうか そうかそうかと

触れさせず

大阪市 天正千梢

拝む縁あたえてもらい近道し
お役に立とうと大それた事思ひ
着飾ってママの興奮まださめず

倉吉市 小林由多香

適材適所と左遷いたわれ
攻めさせてお手並を見る隙つくる
球根を取るだけの花で育てられ

奈良市 宮口笛生

金のない倅せ元気に働けり
恋人の如く妹久し振り
内職へ自由の金がほしい妻

大阪市 鈴木生仏

当選をダルマ片めで待つて居り
八十をすぎて脳みそ入れ替える
会合に年長だけで上の座に

兵庫県 大江秋月

これだけは自由にならぬ妻の票
薄い血縁までも尋ねてくる選挙
女子職員仕事も馴れて口も馴れ

東広島市 高橋鬼焼

ふしくれた手に春がくる鎌をふる
夜桜へ飲めない父に唄がある
此の町の歴史よ桜枯れて行く

柳井市 弘津柳慶

本心を隠して皮肉続くなり
こうなれば意地づく無言の行続く
最夜中に泣く初孫を叱られず

西宮市 藤村メ女

結納の奉書へ筆もかしこまり
一言が胸にささった貌の色
悪魔となる女に不倅つきまとい

岡山県 池田古心

三百六十五日休日と云う己になり
選挙戦聞く耳持たぬへソ曲り
米作り免許取れないまま老いて

大阪市 本間満津子

いろなおし着せ替え人形のように見せ
嘘一つ嘘通すため嘘一つ
三度目の言訳むこうで知っている

米子市 増田竹馬

ままごとの物価を嘆くこましゃくれ

仲人の十人並みは以下のこと
放言は勝手たるべし県人会

和泉市 西岡洛醉

役人の職コンベアーに乗ったまま
悠々自適五葉松の青に溶け
醍醐寺の桜 豊公の顔で見る

大阪市 河井庸佑

本人は過保護なんぞと思うてず
あしたから勉強するとまた遊ぶ
筋通す正論はいていやがられ

大和郡山市 森田カズエ

意気地ない姿で振子止ってる
孫のもり重労働と思ひ知り
天井の夢みましたと患者云い

唐津市 新岡回天子

いそがしい世なれど今日は花見酒
夢にまであの娘のしぐさ忘れかね
豪快なお城が見えて花ざかり

東大阪市 斎藤三十四

自動車事故で二号さんが知れ
初孫へ節句の鯉を上げてやり
キナ臭い情報週刊誌があばく

松江市 岡崎祥月

妻といて子といて孫といて平和
愛情のかけら心のすみに住む

テトラポッドに愛と愛戯れる

玉野市 小谷仙山

泥仕合い沼の深さを量りかね
大凶と言う相性で孫が出来
本物の陰で偽者巾が利き

貝塚市 行天千代

ボールペン消ゴム効かぬ不便さよ
やっと寝た孫へ間違ひデンワ鳴る
寡婦の愚痴聞いても欲し言いたくもなし

大阪市 神田秀峰

多芸趣味何にも物にならず愚痴
チヨコチヨコの病気は見舞届かない
忘れ物届けに行つて置き忘れ

大阪市 今西章雅

ヘルスメーター児は習慣のように載り
むずむずと尻をくすぐる花便り
丸く酌ぎ丸く酔いたい臚月

高槻市 山田季賛

八方美人の僕へ妻最後には笑い
覚悟して家出したのがUターン
馬鹿正直と言われ頑固で暮し

神戸市 佐々木静泉

欲捨ててみれば腹立つことも減り
かど取れただが眼光も失せている
油の切れた夫唱婦隨の歯車

加賀市 細呂木魯木

婦巢性信じて妻は二時を聞く

尼 緑之助

瞑想のひとつとき喜怒が交錯し
彼を又古巢に戻したうしろ指
妻の座を忘れたように女史で居る

仙台市 川村映輝

新聞に初めて載って子の異動
お隣りは増築向いは改築し
褒められて禁煙に齒を食いしばる

公害をじっと見ていたテトラポッド
花盛り景気の冷えにつきあたり
時流とか虚々実々の泳ぎ方
勝ったり負けたり選挙がもう一つ
僕の負け確実なのが落選し

西尾 榮

夕桜自転車押して連れとなり
夜桜へ座職の父を誘い出し
引き越して古墳のあたり夕桜

じっと見ている選挙戦おもしろし
いたわってもらえるだけに気を使い
孫と見るテレビがベッドシーンになり
煙突の煙が薄い不況風

永宗宗義さんを悼む

夕桜この家は祖母と孫生活
花屑の中でボートの行き違い

句集抱き 魂句碑の横に立つ

菊沢小松園

本田恵二朗

歪んでる芯と気附かず独楽まわる
止り木の役目はすんだ喪服ぬぐ
ゆとりない土地にも人の子また生れ
金脈切れてすでに時の人ならず
生活のゆとり冷たい人になり

明治は米昭和はパンという朝餉
オハヨウサンと庭のすみれが笑みかける
この鎗を吞みとり大虎寝てしまい
癖のある小節が売れて人気歌手
本音一つ大風呂敷からこぼれ落ち

若本多久志

正本水客

つまずきの思い出ばかり老の坂
久しぶりまともな挨拶聞く温み
名を問えば孝行の孝と瞳がきれい
お言葉を返えしますがと下剋上

杉の群落は直立し直立して陸
西陣の下絵が生きてくる杉の三角
喧騒からの逃避にあらず石の庭
肩寄せて立って臥って石は囁く

衆僧座禪に着いて春雷はげし

薫風へ ふかき瞳の女王さま

隠岐行

雨意將に至らんとする摩天崖

飛魚の飛翔をライオン岩見てる

岩天を指し 鳥沖を目指す海

隠岐はよし シベリヤ側の海やよし

乗り換えて乗り換えて友来てくれる

橋 高 薫 風

北 川 春 巢

今年また牡丹は話だけとなり

禁煙も二度目学部に籍を置き

妻の里へも猫舌が知れ渡り

子をおんぶそうそうマキシにもなれず

川 村 好 郎

ここも又不況が話題なたね梅雨

真夜中に浮んで消えぬ過去のひと

電算器離さぬ女乾ききり

忠告をためらいコーヒまたまぜる

心孤ならず若葉青葉むす

夢のハワイ観光 日米交歓川柳大会

日 時 昭和51年1月21日(水)から
1月26日(月)まで(5泊6日)
場 所 ハ ワ イ
旅 行 費 ￥258,000
旅 行 社 日本交通公社
主 催 ハワイウイロー社・川柳塔社
団長 若本多久志 会計 板尾岳人
会計監査 西尾 榮

申込方法 第一回 申込金 ￥30,000。
あと毎月例会に於て￥10,000宛積立
(昭和52年3月迄)

申込メ切 昭和50年9月末日
5月以降申込の方は来年1月例会ま
でに￥100,000になるように積立て
て下さい。

参加資格 ☆本社関係の人の推薦でどなたでも
参加できます。

路 郎 忌 句 会

日 時 七月七日午後五時半
会 場 以 和 貴 荘

あ い さ つ

講 演

兼 題

情 熱

「立てひざ」

「寝転ぶ」

「雲」

「似る」

中 島 生々庵
東 野 大 八 氏

若 本 多 久 志 選

川 村 好 郎 選

菊 沢 小 松 園 選

西 尾 榮 選

中 島 生々庵 選

(席題なし)



左から岸本水府・麻生路郎・食満南北諾先生（大正6年3月25日）

麻生路郎物語

(6)

—「番傘」発刊のころ—

東 野 大 八

堺の豪商河仁の外孫である河盛彦三郎は、慶応二年八月二十五日の生れで、よしの（霞乃）はその二十七歳の折の出生である。霞乃の生年月日は明治二十六年二月二十四日である。路郎の五つ歳下になる。

霞乃と結婚した路郎は、当然この彦三郎とも一つ屋根の下に住むことになった。

「父は慶応二年生れのトラの歳で、人には寛大でしたが自分には厳しい人でした。昼二時に帰ると家を出れば、必ずその時刻には帰宅しました。父の脱いだ下駄は、右左キツチリ揃っていました。父の机の抽出の中は、鉛筆やペン、筆にノート等はきちんと並んでいました。その点、路郎ときたら、一旦家を出たら何時御帰館やらわかりません。午前二時になるやら翌日の昼すぎになるやら、鉄砲玉のニックネームがあり、私も眠たければさっさとお先へ寝てしまふのです。もし、夜更けに帰ってきて私が知らなかったら、父が戸を開けにゆきます。何一つ文句を云わぬ父

です。で、いっぺんに酔いがさめてしまうと、路郎はよく言っていました。こんな性格のちがう人間同士が同じ屋根の下にいて、よくもトラヴルが起らぬものだと思心したものです」（霞乃書簡）

彦三郎は当百郎の川柳小集会のメンバーに常に顔を出していたものの、実のところ川柳人というより俳人蘆村で通っていたようである。教師としての彦三郎が数学の拘束から開放される趣味は、自由気ままな文学、芸能の世界であったわけで、蘆村なる号はそうしたムードからする象徴的雅号と受取れる。

「蘆村の雅号は文学好きのメンバーが集って短篇小説を書いてお互いに批評し合ったりした時のもので、俳句なども甚でいえばザル甚仲間です。俳句など互選句を交し合つたもので、句は全々残されています。第一俳人として名乗りをあげるような俳人ではなかったのです。俳句はこの人にとってはほんの暇つぶしのなぐさみものであったわけです」（霞乃書簡）

小説の方は、渡辺霞亭の時代ものの代作を

やっていたとあるが、小栗風葉の代作者から世に出た真山青果ほどの気力も、手づるもなかったらしい。第一そんな気もなかったようだ。こうして彦三郎は、晩年は路郎夫婦とその生活をともにし、昭和五年十一月十四日、奇しくも亡妻の三十三回忌の日に死去した。享年六十四。仏名・釈諦順。

さて、筆者はこの辺で明治から大正へと移りかわる、一種の時代の大きな転換期における柳界の現況に眼をおくことにする。

路郎が十代から二十代へと成人期へ移行する明治四十年（路郎二十歳）の時点で、柳界は「葉柳」（M39・6発刊・小島六厘坊主宰・大原）

「滑稽文学」（M40・1発刊・窪田面笑主宰・東京）

「新川柳」（M41・1発刊・久良岐社中）の三柳誌鼎立時代となっていた。だが柳誌の盛衰変貌ぶりは猫の目さながらで、二年後には滑稽文学に拠る東京柳界は「獅子頭」「矢車」に分裂する。そして六厘坊の死とともに「葉柳」も休刊してしまふ。そうかと思えば、岐阜市

から「青柳」(M42・8田中健吉著)が出た。鰻花坊、久良岐、当百、三面子らの多彩な執筆陣を動員した菊判60頁の堂々たるものだった。

しかし、大正という新世代を迎えた当初には、東京では「大正川柳」大阪は「番傘」に過ぎず、岐阜の「青柳」も大正二年に休刊し八年間の冬眠に入ることになる。

東京の「大正川柳」(T元・8創刊)は、鰻花坊の柳樺寺が奮起一番のスタートで、やがてこれが大正期の新興川柳運動への輝やかしい旗手の役割を果たすことになる。この時、鰻花坊四十三歳。まさに脂の乗り切った盛りである。

「この時々刻々変化し、流転し進展し突発してゆく実在即生命の刹那の観察、連続の状態を捉えてこれを詩にしたもの、それが川柳である」(大正川柳26号T3刊)

「消えてゆく我世の悲しきところろ火 鰻花坊
―京で抱くものという誰は哀れなり
―子を負うて夕刊売にみぞれ降る」

川上三太郎、森井荷十、吉川雄子郎ら有力新人多数を擁した柳樺寺派は、大正十二年の関東大震災まで東京柳壇に君臨し、全国的にも黄金時代を満喫するのである。大正から昭和の年号改称とともにこの「大正川柳」は「川柳人」へとうけつがれる。

鰻花坊のライバルで、明治期にはその偉勢を誇った読売派は「新柳眉集」を、また久良岐社は「川柳文学」をともに創刊したがいずれも程なく廃刊し「大正川柳」の独走に任ね

る形となった。

明治期以降の柳界において終世のライバルと目された鰻花坊、久良岐の二人の先覚者は狂句追放「初代川柳の柳現に還す」目途はともに同じであったが、久良岐は宝暦・明和期の柳樺が帯びる江戸趣味に抱泥し、明治期にはそのことによってひところは、江戸っ子久良岐のエリート意識に浸り切った。

これに対する鰻花坊は、過渡期ながら明治末期における新聞人らしい政治感覚と長州人たるの気骨に溢れた覇気をこめた新世代相應の新川柳を志した。明治維新は薩長の藩閥政治で一切をろう断したが、その藩閥政治は第四次伊藤(博文)内閣まで持ち越され、大正初年の第三次桂(太郎)内閣においても払拭し切れなかった。明治末期の自由民権思想はいれどこの藩閥意識への反逆がバックボーンをなしていた。鰻花坊の新川柳もその例外ではなく、その明治氣質を遺憾なく示したのが「川柳」(M38・11創刊)であった。だが「大正川柳」の鰻花坊の新川柳は、無産者運動の渦巻く大正デモクラシーの思想の奔流にたいには敗退していくのである。久良岐も鰻花坊もその衰退期はともに関東大震災であった。

大阪では、大正二年一月に番傘川柳社が「番傘」を刊行した。出句者は当百家の小集句会メンバーが顔を並べている。西田当百、浅井五葉、木村半文銭、川上日車、杉村蚊象、藤村青明、馬場緑天といった顔ぶれで、発刊趣旨はなにかわりに第一号の巻頭吟に

―上欄屋ヘイヘイと逆らはす 当百
堀口塊人は「ふあうすと」の「明治川柳考」でつぎのように書いている。

「ヘイヘイヘイは、その接客態度の描写であるが、姿を写して心に至り、さらに店の雰囲気まで匂わせる表現力を持つ一句である。これが我々の大阪の川柳であり「番傘」はこんな風に行くことを巻頭に表示した一句でもあった」

柳誌「番傘」の本質をずばりと解明した見事な適評というほかはない。

堀口塊人はまた同誌の「昭和前期の関西柳界」においてつぎのように記している。

「この時、路郎は東京に居た。「葉柳」以来の柳友浅井五葉からも岸本水府からも、何んの相談もなく突然、創刊号(番傘)が手許に届けられた。この時二十五歳、彼の若き血がおだやかでなかったのは言うまでもない。

「番傘が何処から舞い込む。お前のような人間には到底解りもすまいがちよっとみせびらかしてやるといった風に。詩人の私には番傘より晩方の方がどれ位感じがいいだろう―今に梅雨が来れば番傘は破けてしまう。さっさと破けてしまふ。ドス黒い色になつてサ。番傘の奴等俺を鳥流しに会わしたな。覚えていろ、覚えて居ろよ。今更あやまったって誰がきくものか遅い遅い」

これは「番傘」二号の「葉屋落」に載っている路郎の手紙で、勿論、親友に対する冗談と思われるが、それにしてもだしぬかれたくやしさが表明されているではないか」

いづれにしても東京で『島流し』の寂寥感を噛みしめている路郎の憤満ぶりが、この楽屋落ちの手紙の文中によく示されている。さぞかしこの一文をポストに投げ込んだあと、機をみて大阪の当百居に直行した路郎の姿が思われる。だがそこは顔なじみの屯する当百居の連中だし、先輩の当百が新柳誌のリーダー格でいることと、まあまあ話のあと、河盛よしとの結婚という素晴らしい佳日にもめぐりあうという段どりとなる。

明治三十八年七月に大阪から発刊された『新編柳樽』が翌年六月に「葉柳」（小島六厘坊主筆）となったが、その十一月号に斎藤松窓が「西田當百論」（約三頁）を書いている。

「当百は常識の人である。無理をせぬ人である。当百は天才といわれる男ではない。といて凡倉でもない。至極真面目な川柳家である。当百は世故に通じた人である。己に一家を成している人である。わが党にもっともよく浮世を知るは当百也。予や六厘坊主などは坊ちゃんとして商家に人となったに過ぎぬ。苦勞といっても学校が厭やさに腹痛を起した位の罪のないものに過ぎぬ。随って年少気鋭世間知らずの無鉄砲ということは、或は免れぬかもしれぬ。

——鶏を乗せて漕ぎ出す傷しさ 当百
——見ぬ母の年忌つとめる回り年 〃
——つきからは兄の轢りですましとき 〃
当百の句はほとんど家庭川柳といつて可なりである。実世間にはふれた句ばかりだから、嘘がないがヤマもない。「真にして美なら

ず」との評は、当百の句の一面を穿つたものとしてきくべき価値がある。彼の句の欠点といえは「美」の観念の欠乏である。然しこれは真ならんとしてしらずしらずの間に美を忘却したものである。

彼は順礼が地藏堂で時雨を避け、子供に乳をのませているというような句が好きだ。六厘坊の大きく、千二の洒脱なしと雖も、彼の句はみな「真」である。而して彼の句には叙景よりも敘情において多く見るべきものがある。言い替へれば真ならんとする彼の句に穿ちなく、真なくただ美ならんとのみ考えた句には余り佳句が見当らぬ」

まことに世長けて八面いろいろ、平淡雅趣に富んだこの当百の人柄には、六厘坊、日車、半文銭、松窓、路郎など一種の才走って毒気の多い連中も、根っから歯がたたなかつたという感触がある。梁山泊気取りの当百居常連の気ころを抜目なく見通し、緩急自在のその手綱さばきの程のよさに、路郎夫妻の仲人役もごく自然の形でとり出されてきたのであらう。発刊された新柳誌「番傘」の性格もまたこの当百流のムードそのものであったといえる。

「路郎は『番傘』の二号から同人に参加し、猛烈に作句しはじめた。二号発表の彼の句数は七十五、三号では百八。その頃の『番傘』は同人も少く月刊でもなかったから、日頃の作品がたまって比較にならない句数の発表である」（『ふあうすと』、『路郎の番傘時代』堀口堯人）

発刊当時の「番傘」の部数は約二百部で、何号目かに誤植がみつかったので、水府がそれを抱えて路郎夫婦の宅を訪れ、訂正を手伝って貰い発送期日に間にあわせたとある。「新婚十日かそこらの路郎君の家へこんなヤボ用を持ちこむのも、僕が路郎の恋仇なんて？わかるだらう」

水府が友人にそういつて話したという。

——鬼灯を鳴らす雌妓の懷手 よし

番傘三号にこの句がある。河盛の姓であるから路郎と結婚直前の句とみていい。同誌に「肩上也よし立矢の字更によし」路郎この句が初々しい河盛よしのモデルとしたのなら、路郎の彼女への関心ぶりがしのばれてほえましい。ともあれこの河盛よしの川柳の処女作がやがて、麻生霞乃として路郎と同じいばらの川柳人生の幕明けとなるのである。

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

俳風柳多留廿五篇研究

— (六) —



入 江 勇

97 禿にも最中の月をねたられる

清 吉原年中行事中、八月十五夜の月見と、九月十三夜の後の月見は、遊客にとって大散財を強いられる行事であった。遊女に月見の座を強いられると同時に、禿にも菓子子の「最中の月」をねだられたというのが主題句。「最中の月」については『守貞漫稿』に、吉原名物として「一、最中の月 松屋忠次郎」とあるが、詳細はわからない。

晦日にも息子最中の月をみる

西原 賛。子どもらしいが将来性あり。
岡田 賛。 四六・39

98 大学に盟の印までも書牛
清 不明。

八木 盟は湯王の座右の盤の事。『大学』に「湯の盤の銘に曰く、まことに日に新にせば、日々に新に、又日に新なり」とある。

湯王の盟むだ書世に残り

湯の盤の銘にいわくのもん所

五一・3

拾四・20

紀内 賛。

湯王のたらいちんふんかんを書

四四・25

西原 江戸時代の人は素説で、大学・中庸・論語ぐらゐは暗記していたので、このギャグが効いたのです。

岡田 同。

99 吉原の袖ハおこわしやとめられず

清 吉原において、新造が「袖留」をして座敷持となり部屋持になるには、やはりそれ相当におひろめをしなければならぬが、その費用も馬鹿にならない。主題句も、その袖留を詠んだ句。

「お強」は赤飯のことだが、赤飯を炊く程度の費用では、とても袖留のおひろめは出来ない」と詠んだ句。

ないと詠んだ句。

愛敬のない振袖は内とめ

一一・37

という句もあるが、売れない新造の袖留は楼の主人が出費し、それは遊女の借金として残るのである。

八木 要するに大金が要る。素人なら「おこわ」を炊けばすむのに。

紀内 賛。市井の吉事のように安直にはいかない。

入江 吉原志に「おこわ」は「醜婦の異名」とあるように、天下の吉原、レッテルがよくなければ、その資格がないときめつけたものと思う。

岡田 やはり句のオコワは赤飯。

100 しゝたけハ下女牡丹から出来かゑ

清 「しゝたけ」は「革茸(こうたけ)」といい、その形が牡丹の花に似ている。山野の落葉の堆積する所などに生ずるらしいが、無

知な下女の素朴な質問を詠んだ句。

八木「獅子に牡丹」を踏まえた句作である。

紀内「賛。下女の無知を笑った句は多い。

うどんなげを小麦の花と下女思ひ

三七・16

入梅はどう這ひますと下女ハ聞キ

三七・27

いなだ姫看屋の子と下女思ひ

五八・34

入江「同。下女のなま覚え。

岡田「同。

101 有かたや太郎冠者共傘を持ち

清「狂言に大名の召使で太郎冠者と呼ばれる者が多い。そしてこの太郎冠者は、傘を持って登場することが多かったであろう。そうした太郎冠者の状態を詠んだ句か。

八木「『謡曲と川柳』に「徳川幕府の大札能に江戸町人の陪観が許された。御能拝見、町人服。傘一本ずつ賜って城中に入った。町人の服装は紋服に上下を例としたが、無礼講であり、いろいろおかしい意匠をこらしたらしい。傘を賜うことは寛永十八・九・九若君誕生の御能の時、大雨が降ったので、一同へ傘を賜ったことから発したという」とある。

町人の無礼講的な服装を太郎冠者に擬したのであろう。また太郎冠者で「能」を暗示している。

西原「賛。狂言の「末広がり」の太郎冠者にみたてたもの。傘を拝領した町人達の姿は正

にびつたり。

室山「御能拝見で「道成寺」を演ずると雨が降る、と古川柳ではなっていることが多い。傘は八木説の如く賜わりものである。それを狂言の太郎冠者に擬し（太郎冠者で「能」を暗示は少しおかしい。能には太郎冠者として登場ししない）、西原氏の「末広がり」をきかせ、將軍家礼讃となった句であろう。

入江「前同。江戸市中を二分し、一町から家主一人ずつの割にて半数交代で江戸城中で四座の御能狂言拝見を許された。交替の時に弁当と酒が出る。そのとき錫の徳利をうばいおう混雑は大変なものであったという。傘が必要なのは、もちろん見物席が土間だったからである。

右に傘左にすずのありがたさ

安三・宮1

岡田「御能拝見説に賛。但し町人はお庭で拝見した。庭だから雨が降ると困るので傘を賜わったのである。

102 うっかりとお咄しのやむ時鳥

清「『お咄し』というのは「さて又い」の出番何番と出る。直に御咄し御咄しと云って、江戸中触れあるく人有りける」（『宝暦現来集』巻二〇）とあるように、富突の当たり番号を、江戸中に走り廻って売り歩いた商売である。従って句の意は「お咄しお咄し」と触れ歩いてる最中に、時鳥の声を聞き、一瞬売り声を忘れたと云うのであろう。

とめるなといふ身でお咄お咄

一五五・4

主題句、時鳥の声で会話がとぎれたとも解せるが、平凡な感じ。御咄しのいせい良さと時鳥の聲に一瞬売り声を忘れた所に面白味が感じられるが……。

八木「賛。

咄しの寄せも四文出す草履札

紀内「礎稿後半のように考えていました。しかし「お咄し」という語が存在するのでは……。

西原「お咄売りにしては、時鳥がそぐわない。

室山「時鳥一月一夜、と考えると、礎稿の「御咄し」はどうもびつたりしない。これはやはり、紀内氏のいわれる通り（清氏は平凡とされたが）お伽衆あたりの咄が時鳥の声のためにとぎれたと見たい。

入江「礎稿後半賛。時鳥の初音を聞いて、その珍しさに「気抜けしてぼんやり」した、あまりやんどなき人たちの会話が中断した。初音を聞くのはだれしも関心のあるところ

で、

一ト声でわれも／＼と顔を出し

一ト声は茶摘も等をかたむける

貴人として例外ではない。「お咄」の「お」で上流階級をあらわす。

岡田「室山氏の、大名のお伽衆説も面白いが、入江説でも通ずると思う。

一五五・4

一〇二・37

二四・22

八〇・2

『直原玉青画伯』の近況

中島生々庵記

直原玉青画伯は、わが「川柳塔」誌のために創刊号から毎月、満10年余に亘り麗筆をもって表紙を飾って頂き、お蔭さまで、全国柳誌の中でも特別異例の光彩を放つ存在であることはつとに皆様ご存じのとおりである。従って、玉青画伯について今更ご紹介がましい事は全く無要であるが、永く矢野橋村師について南画の本流を学び、その後継者として青玲社を主催、一昨年大阪府より社会教育文化功労賞をうけられ、本年一月には紺綬褒章を授与され、現在、社団法人日本南画院副理事長として御活躍中であり、その間、中国、東南アジア、インド、欧州、台湾等たびたび海外に見聞をひろめて現代絵画の研鑽を重ね、帝展、日展、日本南画院などに於て、文部大臣賞を初めかずかずの榮譽ある重賞をうけられた。

また「新しい南画と俳画の描き方」「現代南画の描き方」「禪の牧牛図」「江湖風月集」「俳画入門」「水墨画入門」等々、ひきつづいての著書も精力的に出版され、傍ら青玲社を主軸とする後進門弟の指導にも徹底した親情と熱情をもって当り、門下に教えを乞うもの実に年々倍加する現状であることは、まことに故なきにあらずである。

その直原玉青画伯の身辺に、このたび新しい御消息を承ったので、皆様にお伝えし、皆様と共に、ますますの御清祥と御雄健を、ここから祈念したいと存じ、親しく御心境をお伺いするためにお目

にかかる機会を得た。ただ憾むらくは、私の禿筆が、どの辺まで意を尽し得るか甚だ心細い次第であるが、出来るだけの努力を傾倒してお話の要点を纏めてみた。従って全ての文責は私にある事も念のために申し添えておく。

お話——「日本に南画をもたらした黄檗僧逸然是、幕府の命によって陰元禪師を中国より迎えた。私はその功勞を顕彰するために、八年前、等身大の木像を知人の彫刻家に依頼して制作し、同時に黄檗山内に青玲庵南画堂を建立、その庵主として僧籍に入るために得度し、沙弥となった。

たまたま今年四月、恩師矢野橋村先生の十周年忌に当り、矢野先生の像を併祀して、私は月のうち三分の一をここに住職として滞在することにした。そして、心を鍛え、想を練るところにしたが、恩師智道人矢野橋村先生の智と、逸然性融禪師の融を合せた智融の法名を受け、座元位を繼承することになった。

又このたび、俳壇「ほととぎす」の同人に推挙されたことは、併せて私の大変欣びとするところである」と語られて次の一句を示された。尊い話である。

句画禅の一如確む花の宵

玉 青



直原玉青画伯



菊沢小松園選

和歌山市 樫村 ふみよ

ぜいたくはこぼれる程の湯に一人

セメントの割れ持ち上げる春の草

病廊で聞く養生のひとつくさり

氣やすめであれ信じたい今日の易

捉われの心がかける色めがね

寝屋川市 柴田 恵美子

春の海抱かれてみたいうねりよう

弟を世に出すと云う夜の蝶

そろばんが減法つよい生き字引き

花いちもんめあの子が欲しい欲しい夢

大阪市 神夏磯 道子

名人の手で息を吹く紙細工

新入社教える方も肩がこり

過去許し心の縄がとけている

おくれ毛が春を呼んでる川つぶち

柏原市 小谷 葉子

秒針は静か過ちを裁し

遠ざかる影 いくたび人を失いし

錆ついた錨は海に戻りたく

あざやかに別れる時の着物買う

島根県 飯塚 虎秋

金よりも心と思うほどに老い

失業の庭にきれいに咲いた花

在りし日の足音がする黄水仙

ほどほどにせんと外堀埋められる

岸和田市 池田 香珠夫

岸からの凍てが湖心へ伸びてゆく

塔下の餌屋へ鹿も子も駆ける

世の中を逆さに見てるかかり風

腹立てて帰った店へ忘れもの

大阪市 横地 正彰

拾い屋も鏡の前で髪をなで

手抜きとは云わず合理化という仮面

手抜きした理容を仕上げの櫛が知り

デパートに自然恋しいつくし鉢

弘前市 小山内 貞男

ここの一番女涙を武器とする

いよいよとなれば札束動き出し

方言を忘れ人間味も忘れ

遭難の場所も見せてるバスの旅

熊本市 有働 芳仙

山菜も一と味違う京の里

十本の指それぞれにある役目

選挙戦団地の空気ゆれ動き

美人だと一押し多い聴診器

羽咋市 三宅 ろ亭

保証人断ってからのまづい仲

鯉泳ぐ空に不平の雲一つ

落選の車はそっと街を抜け

実と虚の選挙へ関心ない桜

唐津市 岩下 照沖

デパートの屋上蛸蛸手足出す

石仏は花の人の煩らわし

千人風呂女意外によい度胸

岡山市 船越 洋之

白鳥の羽根の下から澄んでくる

金詰り知ってる分譲地の草か

風向きで変る回転椅子嫌い

尼崎市 中谷 利美

許す気のやはりはじめはつけたがり

その中にひとり晴着が泣く器量
あなたからあんなになった定年後

八戸市 安田 紘

腹立てた影へ満月ついて来る

息子もう酒のサカナになつとれず

六十年思えば引き算だけだった

鳥取県 伊藤 静枝

人事異動他人事となり鋏握る

ふるしきにおめでたこめて配られる

春闘と縁はなくなり草むしる

大和高田市 岸本 豊平次

謝まりに行けば赤チンでもう走り

死神が見放なしたのか食進み

明日香路は蓮華菜の花だけでよし

堺市 羽田 一扇

僕にすぐ出来るのは献血ぐらいです

気にしてるとこへ視線が止まってる

真っ黒に塗ったページが有る日記

島根県 岩田 三和

わがままな手足そろってストをする

くぎ一本ぬけているから人気者

放ち飼い いなかで育つひよこ達

愛媛県 小山 悠泉

失恋と見たり女のジンフィーズ

ひと愛す幸せ鏡知っている

不合格まだ国立の灯は消さず

大阪市 小谷清女

針をさす言葉も次第に錆びてきた

惜しまれて花びら天寿全し

プライドを捨てたら肩が軽くなり

豊中市 高橋古啓

もう二度としません恋の書簡集

焼き立てのパンを届けるハイウェー

死に際が鮮魚の生きの良さになり

今治市 伊藤一郎

選挙カーゆっくり過ぎる花の山

役付になったと庭で振るクラブ

優勝旗南国土佐へ初下り

今治市 真山国彦

戦争を知らぬお城の白い壁

政権はどちらでもよし平和なら

式の順待つ花嫁も見る桜

今治市 古野伶人

汚水処理出来ずそのまま倒産し

桃咲いて此処に薬屋根見付けられ

煉炭を遊ばせている温かさ

滋賀県 柚木踏草

祈らない世代が派手な手をたたく

べてん師の数字そろそろ絡み合い

王手飛車始業のベルにくずされる

西宮市 朝山千世子

花吹雪世の浮沈など知らぬげに

散歩道バラ垣洩れるセレナード

女遍歴老いてさかんな顔の艶

鳥取市 勝山紫宏

正直に写す鏡に恐れ入り

御馳走を前にスピーチ空廻り

友情のきずなが金で揺れ始め

広島県 原田篤史

街路樹に芽を出せという南風

約束の都に遠く土を掘り

気紛れな旅をしている住所録

寝屋川市 江口度

喉通る時柚子の香りがしたような

吊皮で咲いたな散ったな思うだけ

それは小さな家でローンの鎖つき

岸和田市 池田露子

もう誰も儲かりまっかとは言わず

男見る目が肥えたので嫁き遅れ

おふくろの味が両家で違い過ぎ

吹田市 藤原世史春

ショウウィンドウにわが勤労の姿ゆく

反戦と平和の旗で叩きあい

スト製造株式会社が出来そうな

寝屋川市 香川亜成

別れた日味の無いガム噛んでいた
鉢の中だけの生命金魚生きている

島根県

松本文子

忘れようせめて別れの彩を選ぶ

報われぬ愛と知りつつ花を生け

赤穂市

谷口赤童

統一戦予算審議もそこそこに

父母瑞喜高級外車で墓詣り

今治市

薦本昌道

恋ひそと寡婦と言う字を消したい日

イメージを強調するかサングラス

尼崎市

駒村岳麓

家欲しく鬼と云われても貯金する

出郷に歩るいた峠バスが行く

東大阪市

崎山美子

社の浮沈どうのこうのと縄のれん

有難くうければ代償もとめられ

和歌山市

西山みゆき

温泉の湯気が美人に見せてくれ

終い風呂無事な一日足袋洗う

和歌山市

吉野久子

パトロンと息子をダイヤル間違える

養老院口にしている淋しい日

新潟県

高野不二

計算が合わぬ飲み代払うて来

夫婦してかかとの高い靴をはき

鳥取県

加藤茶人

科学では解けぬ何かへ神を出し

手に汗を握る場面に父が起き

大阪市

内藤ますえ

金魚ゆうゆうインフレの世を泳ぐ

雨降れば雨も又よき花の下

羽曳野市

麻野幽玄

拝観料取って賽銭箱も置き

終電を待ってお風呂の湯を落し

鳥取県

林露杖

散り果てて見せたい造花のレジスタンス

月末のエレジー家計簿から洩れる

大阪市

秋田茂

勇み足わが青春の一駒に

象の貫禄大空に鼻を向け

橿原市

西本保夫

住友のプライド旅行も固苦し

おべっかを使ってまでも出世せず

鳥取県

福田保子

梅一輪一りん花瓶で春を咲き

女なる悲しみ男の嘘に酔い

今治市

大本バット

合格と嬉しがらせて消える金

ぬるま湯で寝そべる癖はパパが付け

今治市 今井松花
尻に敷けそうな相手で承知をし

御先祖の墓の下から土筆が出

鳥取市 大塚豊生

寝たきりへ一枝だけを託びて折り

円満な話になって墨を摺り

諫早市 江副二牛

旅日記〇〇と云う個所もあり

里帰りただぐっすりと眠るだけ

和歌山市 桑原道夫

ハイヒールの高さで女歩いてる

温泉の効能一応読んで出る

兵庫県 高橋近江

握手する候補の顔にホクロ見る

知る者は看護婦だけなりノーパンツ

新潟県 市川一峯

学ばせて旧家を廃居にしてしまい

先生もひき逃げをする社会面

島根県 堀江蓮露

どうしても許せぬ仲も孫は抱き

過疎の地にこれ見よがしのパンタロン

堺市 栗本藤持

夕焼に海女の若さの乳が張り

世の中を知らぬまい池に死す

大阪市 堀口欣一

風薫るともいえずこころは大正区

悲しさは親子兄弟顔が似る

尾鷲市 渡辺伊津志

役人の給料なじるからっ風

お時間を下さいという生ま返事

八尾市 納史子

もう引けぬ女の意地を見せておく

愛犬の産み月数え子無し妻

鳥取市 岸本無人

めぐまれているのにストの音頭とり

振り向いてくれるな赤いランドセル

尼崎市 大垣たもつ

片手だけ親にひかれる星の下

安堵して逝ったか夢にさえも出ず

松江市 梅本登美也

春闘をよそに混んでる安定所

大物が落ちて築地はさびしがり

姫路市 大原葉香

駅弁でせめても旅の喰べ歩き

退職の感傷仰げば飛行雲

大阪市 新川貞祐

宛先不充分税務署のは届き

ぬるま湯の役人ベアを言い募り

高知市 竹崎

蕾から花までの距離語らない

ふるさとを語りつづける貝がらか

唐津市 田中 三男

どろどろに汚れた見栄にしがみつ

幕末の志士よ今ならどう生きる

名古屋 大 林 曲ん手

終点のない人生は吠えている

今治市 園 部 正 則

移植樹も生きついたらし新居の香

堺市 堀 畑 日々子

あす花見衣裳衣桁にかけて寝る

倉敷市 高 山 みどり

花畑春しめくくる雨となり

出雲市 藤 井 晴 月

露のとう香りと心いただいて

河内長野市 井 上 喜 醉

初対面猫をかぶって話しあい

寝屋川市 福 富 隆 子

お便りの誤字もなおしている頑固

大阪市 花 田 繁 子

商売の怖さいつのまにやら消える店

大阪市 村 島 秀 村

梅さくらさつきとつづく花だより

大阪市 須 浦 つ ね

土筆摘む子等にまじって春の土手

松江市 岡 崎 雪 美

大阪のみやげやっぱりおこし買

八戸市 島 田 昭 治

一代の財をこの世に置いて逝

大阪市 平 井 露 芳

心平の死ぬまで蛙の詩歌

富田林市 中 村 優

日本列島不況の中の花盛り

泉佐野市 大 工 静 子

恥じることなく婦人科へ足運

伊丹市 樫 谷 漫 柳

一泊の楽しみ奪う新幹線

和歌山市 山 下 十 声

お願いと叫び政見貧しそう

宝塚市 吉 田 とんぼ

言い過ぎただけで寝返りくりかえ

高槻市 山 田 スミ子

子を叱る声お隣へすき通

新見市 吉田落猿
診断を受けて無用とさとされる

唐津市 三浦広坊
小企業花見どころでない季節

唐津市 岩崎実

横顔は落花の舞いの中にあり

豊中市 出口セツ子

君逝きて悪夢の如く椿散る

唐津市 田口志光
中央は大統領の車なり

唐津市 山下勝一
口答えされて吾が子の年を知り

堺市 檀野千世子
乗客の目がそつといく忘れ傘

岡山市 西田朋子
落城の哀史へガイドの七五調

近

作

今治市 月原宵明

悪友の嘘も許そう花曇り

春の雨おむつの暖簾くぐりぬけ

知るまいと思えどバックミラー知る

聞きこみの刑事はまさに日雇夫

岐阜市 市川鱗魚

運の無い人をきれいな過去と言う

我が人世余白うずめる子を信じ
かたくなな頑固叙勲の以来父

東京都 池口吞歩

盲愛に蝶よ花よの養子先

泳ぎさえ一人でやらぬ養子先

今治市 長野文庫

頼りない金脈として日々稼ぎ

今さらと思ひ結局知らず済み

お詫びして訂正視聴者丸められ

春風に乗ってお寺をまわるバス

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

尼 緑之助

国会中継わが一票は眠りこけ 本多 柳志

何気なく見ていた画面に居眠り先生が居た。我が一票を献じた選良である。頭から冷水である。かつて諷刺や皮肉が重用視された頃であった。時流と共に表現と字句の差こそあれ、この流れは厳として続いている。ユーモアの角(かど)を取って、訴えるあたり、川柳の醍醐味と言えそうだ。

言論の自由はトゲを含んで絶叫調となり、狂人めいた不快感をまき散らす、こんな時、文字が、間(ま)を取って訴える力、しかも極めて簡潔に胸を叩く、文字のウエイトが漸進しているように思える。

居眠りの原因は？ 議会活動とか称するものの疲れか、いきまぐ壇上の絶叫を猿芝居と受け取っているせい、否、言語同断の不まじめだ、解釈はいろいろあるだろう。十七文字は巾広い問題を提出している。ただこの句だけの問題ではない。

割り切ったつもりの悔いに居直られ

八木 千代

よっぽどのことであろう。時間が経つにつれ、悔いは更に劇しく立ちふさがったのである。女の性(さが)か？——女性だけとは限らないが、人心の機微を反省を混じえて吐いた佳句。

あきらめの中に無色の虹が浮き

嘉数千代香

これまたベテラン、きれいに女ごころ(これも女に限るまい)を詠い上げている。無色の虹が彩って来る。

買物へ母娘別れる日が近い

錦織 文子

嫁入り支度ともなれば、平素のおてんばも母のバックが何んとなく必要になって来る。時代は変わったようでも母情の骨頂は同じだ。名作を見る目で孫を見つめた

たり

阪上十止庵

人間とは何んと不思議な動物であろう。偕り、諦観を背景に、孫の顔や動作は限りなく微妙な愛情を提供する。ただ老人の他愛ない感情とばかり片づけられないように思われる。

終着駅父のドラマは乗り替える

小浜牧人

勿論乗り替えは冥土行ではない。悔いも消え、慾も捨て、安穩コースを選ばざるを得なくなったのだが——又、別な夢にいどんだのである。「ドラマ」を真ん中に、淡々とした表現に老後の意気を示している。

票託みにダルマもじっとしておれず

玉置 重人

好戦国日本、いや日本人のみならず、いろいろ理屈をつけて、争いに参加する。片目ダルマをして、その不安を語り、今年の選挙の感懐を呼びもどしつつ反省もする。

ふり向いた犬が負けて来た貌になる

岩本雀踊子

負け犬はかあいそうである。ならぬ勘忍をして来たのかも知れない。対話から背後追及に及ぶ、作者の目はせんざい。

十字架を背負うに肩巾狭ま過ぎる

藤田軒太楼

肩巾だけで背負う能力の断定は出来ない。自嘲の句、少し漢字の使い方に気がかりである。

妻を相手にけちな言い合い

渡辺 暁童

七・七調の可否も結論に達していない。原流に武玉川がある。短歌のゆっくりリズムに対し、淡泊さもまた、時にこころよい。

菖坊主の中で居眠る春の精

直原七面山

この作者も十四字詩党である。飄軽で愛らしい菖坊主に肩を叩かれたのである。

大根を干して淋しい道しるべ

香川 酔々

今では拡幅舗装された田舎道、古い石の道しるべが残っている。かつては重要な役目を持っていたものだが、大根干しの道具に使われている。現古比較の感懐。

俳句調だと難する人があるかも知れないが、あるとすれば「柳俳」をムリに区別したがる思考に抱えるものだ。川柳の根元は人間、人間の肌で捉えたものなら問題はない筈。敢て推した所以でもある。

百人一首と川柳 (12)

富士野鞍馬

二七 中納言兼輔

みかの原湧きてながるるいづみ川
いつみきとてか恋しかるらむ

(古今集)

この「みかの原」を、

雪駄では通りかねたる三日の原

(武初3)

ふりむけば月も名にあふみかの原

(ケイ五)

いくちなく公家侍の三日の原

(武十一20)

と川柳によまれている。みかの原は、木津川の北岸で、離宮のあったところである。

また名を使って、

中納言兼輔供と旦那めき

と戯作されている。

株木 (二四九2)

兼輔は、藤原利基の子である。中納言兼右衛門督となり、承平三年(九三三)五十七才でなくなった。加茂川の堤のあたりに住んでいたので「堤中納言」と呼ばれていた。それをまた川柳は

白昼は質屋へつつみ中納言

(ケイ二七)

と詠んでいる。

二八 源宗干朝臣

ひねゆき

やま里は冬ぞさびしさまさりける

人めも草もかれぬとおもへば

(古今集)

源宗干は、光孝天皇の皇子是忠親王の子である。「源」の姓をたまわり、右京大夫、兵部大輔となり、天慶三年(九四〇)になくなった。「古今集」「後撰集」に多くの作が見え、三十六歌仙の一人である。

川柳には、文句取りで、

きらず汁人目も草も枯れてから

(室十三礼4)

二九 凡河内躬恒

おとしこりのみつね

ころあてに折らばや折らむ初霜の
置きまどはせるしら菊のはな

(古今集)

この歌に因んで川柳は、

白菊をおきまどわせる稚児ケ淵

エイ(二一42)

と、江の島の稚児ケ淵へ白菊丸が投身した伝説を詠み、また、

おきまどわせる白すきと下女たづね

文和(二四〇9)

十月はをきまどはせぬきくの御座

木卯(九二16)

と、白すき紙や、上野のおねりを詠んでいる。

凡河内躬恒は、終生、諸国の国司として、位も六位に過ぎなかったが、歌人として重んぜられ、貫之らと共に「古今集」の選者であった。

三〇 壬生忠岑

みぶのただみね

有明のつれなく見えしわかれより
あかつきはかり憂きものはなし

(古今集)

この歌に対し、

有明もただ有明も名歌也

柳枝（二八二〇）

と川柳は詠んでゐる。「ただ有明」は、後徳大寺左大臣（八一）の歌である。

壬生忠岑の家系もその生涯もよくわからない。はじめ右近衛大将藤原定国の隨身であり、身分は低くかったが、和歌に秀でていたために、貫之等と共に「古今集」の選者に加えられている。その子が忠見（四一）である。

また、壬生の小猿に洒落て、

忠岑の久離を切った小猿也

という句も作られている。

歌の文句にかけて、

赤土斗り憂物はなしにり

三箱（二四〇五）

あかつきの枕にたらぬかるた箱

（初六）

持てぬやつれなく見えし別れより

（拾五）

とも詠まれている。

三 坂上是則

あさばらけ有明の月と見るまでに

よし野の里に降れるしらゆき

この歌は「古今集」に「大和の国にまかれりける時に雪の降りけるを見てよめる」と詞書してのせられてある。

坂上是則の家系はわからないが、醍醐、朱

雀兩朝に仕え、大和や加賀の国司をつとめたことがあった。三十六歌仙の一人で、子の望城は「後撰集」の選者の一人であった。

川柳に、

是則へ見せたい所は江戸見坂

水治（七四三六）

と「坂の上」に洒落て詠まれている。

三三 春道列樹

山かはに風のかけたるしがらみは
流れもあへぬもみちなりけり

（古今集）

春道列樹は、新名宿祢の子である。国司をつとめたこともあるようであるが、文章博士で、延喜二十年（九二〇）には六位になっていた。歌人としては、あまり有名ではなかった。没年はわからない。

川柳は、

一二首は紅葉の照りで撰むなり

洗路（二四三七）

—紅葉を詠んだのは他に菅家
かりそめに風のかけたる薬鍋
流れもあへぬ紅絹裏へ捨利なり

乙テ（二四〇二）

—文句取り、捨利は質の利息

三三 紀友則

ひさかたの光のどけきはるの日に

しづごろなく花の散るらむ

（古今集）

友則の父は有友だと伝えられ、貫之（三五）の従弟にあたる。官位は高くなかったが、歌人として知られ、貫之等と共に「古今集」の撰者であった。それが完成しないうちに、六十一才でなくなった。三十六歌仙の一人に数えられている。

川柳は

松と紅葉の真中を花が散り

—前がもみち次が高砂の松

乙テ（二四〇五）

—文句取り

三四 藤原興風

たれをかも知るひとにせむ高砂の
まつもむかしの友ならなくに

（古今集）

興風は、相模椋道成の子で、醍醐天皇のころ、主として国司をつとめた人である。琴の名手としても知られていたが、歌人でもあり、三十六歌仙の一人に数えられ「興風集」という歌集もある。没年はわからない。

川柳は

興風をはさみ散る花匂ふ花

—列次をいう

誰をかも知る人にする尉と姥

—文句取り高砂の松

白飯（九七三）

愛染帖

橘高薫風選

三角の底辺に居てスト嫌う

白い画布へ白い絵の具で描く歴史

大阪市 西川 誓二

ピエロです喜怒哀楽を持つが故

鳥取市 河村 日満

安楽死のことなり活字小さくとも

山本 素郎

残り火を掻きたてる手の温さかな

更年期地盤沈下に似て佗し

日本海雲団々と梨の花

満ち潮に乗れば御伽の国につく

妻の留守蟻通りやんせ通りやんせ

私だけの土橋が地図にある四十

野心でもない活気の出せぬ人

綿菓子を頭に詰めて風邪の床

思い出の植樹の山を見に出かけ

ときめきの胸を締めてたふるゝい帯

雲浮ぶ解放側の銃口に

噴水の虹に嘆きを消して去り

錆びついた門扉のぞけば朱い花

無医村の踊りが無形文化財

定退の男花道よけて行く

茶をついで口数多く妻老いぬ

しゃべらねば淋し墓標へ花が散る

病上がり顔いたわって女笑む

徒食する男に花は咲いて散る

父哀し母の男として映り

活字ばかりの政治で心の飢え満たす

動かない時計と生きている足と

やり直す決心故郷のみどりの中

青敷市 藤川 良子

青敷市 小砂 白汀

鳥根県 大峠 可動

竹原市 三宅 不朽

八尾市 高橋 夕花

富田林市 岩田 美代

守口市 野呂 右近

今治市 大本バット

青敷市 水粉 千翁

堺市 高橋千万子

新宮市 大矢 十郎

三重県 川上 大輪

守口市 羽原 静歩

大阪市 河野 君子

岡山市 行本みなみ

八尾市 香川 酔々

大阪市 宮尾あいき

大阪市 正本 水客

青森市 工藤 甲吉

新川 貞祐

合掌の母指先に子を宿し

蹴上げねば弾まぬ毬を抱いている

夢の中でも夫婦で汽車に乗る

桜満開劣等感をもてあます

落第は既定の事実石を蹴る

過去帳を楽しむ先祖がジンジロベエ

老いて尚桜かなしや花盛り

香煙はゆらいで供花にたわむれる

池見てる女ひとり橋のように静か

ひと刻の座禪雑念を楽しんで

太陽が毎日昇るから死ぬす

かりそめの恋を見ている仁王門

大阪市

小出 智子

忘れたきことは忘れて夕鳥

豊中市

高橋 古啓

蹴られても踏まれても土の寛容

松川 杜的

息子との距離を埋める酒もがな

柏原市

小谷 葉子

流れくる花びらヨウ子の帯とする

八尾市

大路 美幸

落花一つ見つめて哲学の小径

和田維久子

流されて流れて阿呆になりました

今治市

原田 一風

農に生きてる不況おそれない

岡山県

竹内 翁童

ひとりしずかの花へ小蟻のたわむれか

小泉 紫峰

蟻螂の斧にも如かず職場去る

大阪市

江城 修史

城番の更けて歴史の中で寝る

松江市

梅本登美也

天国で会う約束で老の猪口

紫宏

そむかれてたたずむ視野の重なりよ

八尾市

高杉 鬼遊

女子大のくるま座楽譜を口ずさむ

岡山県

出原 敬一

会者定離いよいよピッチあげて来た

柳菜 鶴丸

雪の夜は雪より深く愛を積む

美木市

井上 巖

私を遺して逝った人を背信と呼ぶ

松江市

岡崎 祥月

木もれ日に染って肩を組む二人

竹中 肖二

混血の子だけが戦果として残り

島根県

堀江 正朗

黙々と漬物石になっておく

今治市

今井 松花

夫の死を笑って送ることも出来

田中 要保

妻といる音に変わってさあ春だ

島根県

堀江 芳子

独りごつ女が一緒昇降機

高槻市

若柳 潮花

真心が一筋の涙になりました

木山 古庵

風光るこころ触れあう瞬時から

神戸市

来住タカ子

パンジーの小鉢あがなう老夫婦

和歌山市

沢山 福水

老化とはつらしよ掴む薬もなし

麻野 幽玄

生きている証に桜散ってゆく

大阪市

金井 文秋

地球儀のこころが戦禍の生地獄

今治市

真山 国彦

道を問う饑餓野手慣れた受け答え

山根 白星

腹立てていた値上りに馴れてくる

小松市

馬場 魚山

酔客が元の亭主で哀れなり

今治市

伊藤 一郎

不意に酩酊うて沈丁花の匂い

西出 一栄

犯人と知って女のなお底い

倉敷市

高山みどり

内職で当てた二号の謀反心

今治市

伊藤 一郎

不意に酩酊うて沈丁花の匂い

西出 一栄

叱られた学級日誌の花曇り

東大阪市

竹中 綾女

手土産を子供に渡し上りかけ

尼崎市

黒川 紫香

投句先 千560 豊中市中桜塚3丁目13

石山の石の白さを増す小雨

東大阪市

竹中 綾女

手土産を子供に渡し上りかけ

名古屋市

吉田 水車

15. 橘高薫風宛 (一人三句)

川柳の出る幕

人間陶冶—その展開と実践 序

戸田古方



「川柳は遊びではない」

私は少くともそう思っています。時と処を選ばず楽しめるのが川柳ですから、趣味としても最高のものの一つだと思っています。現在、川柳を遊びだと思っていられる方があったとしても、まじめに、一筋に打ち込んでいかれたら、いつかきつと、遊びでないとわかってもらえると思っています。

私の川柳への出発は、路郎先生の所謂、「人間陶冶の詩」からでした。「人生批判、社会批判」と傍書がついていますが、批判とは、何が正しいかを考えることであり、反省ということにもなります。宗教の世界では懺悔ということばでこれと呼んでいます。いざこれにしても、将来のより大きい、間違いない、不変の幸福を期待してのことです。

今年、昭和五十年、早いもので、昭和も半世紀たったのです。近頃、あるところで、

「昭和五十年 半省期」
と書いてあるのを目が止まりました。勿論「半

省期」とは半世紀と語呂を合せた当て字ですけれど、いみじくもいうたものだと感じました。反省の反省の省、期は五十年の期間、半は一寸ということになります。だが実は年頭以来、各所で各人が、「昭和も大きな曲り角にきている」とか申しています。

本年一月五日、満七十歳を迎えました私。

昭和になった時ははたし、その頃私は何不由のな幕しに恵まれていましたが、世間は一九一八（大正七）第一次大戦が終わって、平和にはなったものの、戦後の不況の影が忍びよって来て、昭和に入った一九二七頃にはそれがエスカレートして、大恐慌に入りかかっています。喰えぬ人々の赤化から、全体主義へ、一九三九（昭和一四）には第二次大戦、一九四一（昭和一六）には太平洋戦争、そしてそれが終るのが一九四五（昭和二〇）。その時日本は文字通りスカラカンになっていたのです。

日本人はそのドン底から三十年足らず

で世界も眼をみはる立ち上りを見せました。が、さて、それで日本人は幸せになったかという、残念ながら、答はノーです。それではこれからどうなるのか、どうすべきか。ズバリ、好景気にバイバイして慢性的不景気時代を生きねばならぬということ。経済の高度成長から安定成長、つまり低成長に甘んじなければならぬということになるのです。麻薬中毒治療のための禁断症状の苦痛を暫く覚悟せねばならぬことになるのです。

五年前、「進歩と調和」をテーマに万国博が大坂に開かれました。進歩は遂げられたというものの、調和の方は。皮肉にも万国博の最中から、公害が口々にされ始め、それから今日まで、一日として公害を耳にしない日はありませんでした。続々と新しい公害のご登場です。同時にエコノミック・アニマルという結構な悪名も海外から聞えてきました。

造れば儲かるという高度成長に酔って、もつとおねねばならぬ注意を怠り、犠牲を忘れていたからなのかもしれません。儲けたい生産者たち、高いものは買いたくない消費者たちの焦り。自然の摂理とは恐ろしいものです。悪魔のような公害の出現に、今までなら我慢していた人々も口数多くそれをいい出すようになっているのも手伝っているのではありません。

今年の年頭所感で、ある人は「美味いものを安く食べなければ農村へいけ」といいます。私は戦後の乏しかった時に使われた銀メ

シという言葉を出しました。日本の食糧自給の上からいっても、見棄てられかけている裏作を復活させねばならぬ。農民も土地の恵みを喜ぶことより金儲けの農業に変わってきています。過疎で減った労働力を補うため、週五日制などで余ったエネルギーを農村のために吐き出すべきである、さらに出来るなら、過密の都市から農に帰れとも付け加えているのです。都市に居据っているのなら、高くて不味いもので我慢せよと結んでいます。

また、ある人は、昭和五十年の課題の中で「危険な富める社会からの脱出」について述べています。一昨年末の石油ショックが引金になって、つまり、石油を使い過ぎて今の生活への反省をいおうとしているのです。石油は熱を加えればすぐ燃え出します。石油で造えたものに埋まっている現在、石油蛋白で作ったものを食った人は胃袋から燃え出さずともしれないなどは戯談としても、火事毎に驚く程多数の死者が出ているのもこのためでしょう。自然のものを食べ、自然のものを着、自然の中に住めとの警鐘でもあるのでしよう。

いうならば、尺取虫のように、真の繁栄、真の幸福を将来に期待しながら一時身を屈める、これが安定成長なんでしょう。だが、それは慢性的な不況の形をとるに違いありません。心の用意の出来ていない人は、不如意に不平を募らせ、不満を爆発させるでしよう。果ては止る所のない不安にさえ落ち入るようになります。欲望の抑止を忘れて暴走すれば、

ば、ピアノ殺人やベット殺人です。「あいつのせいだ」と悪玉を作って、それに責任を転嫁させずにいられないのです。今こそ欲望の見直しが要求されているのです。欲望の自然主義から欲望の人間主義、人と共に喜ぶのを忘れない心構えに切り替える。是非石油ショックを神風にしたいたいものです。人と人の間で生きるのが人間だ、といった人があります。が、今こそ、そのことを思い知らされます。

川柳はわれわれを、そういう心の用意の出来た人に培い、育て上げてくれるのです。抜苦与楽の詩、反省の詩として、六面八臂の働きをするときです。苦しいときにこそ佳句を吐かせてくれるのも川柳。人の世から欲を押え、迷いを却け、争をなくし、地上の楽園を開く鍵を持っているのです。今こそ、川柳の出る幕といわずにはおられません。

青春の

かけら



関 美 子

数日吹雪の続いた二月の或る日の電話口、「文芸雑誌で君の川柳を見つけた——」と。時折、未知の方からこうした事があるから驚かなかったけれど、その物静かな声の響きをかつかつかで聞いたように思えるから次の言葉を待った。なかなか話してくれないその

時、もしやという気がしてこっちから言ううとやはりIさんだった。

元氣だったのね、本当にあなたなのねと念を押すうちに鼻をすすりあげてしまつて風邪ですと弁解する。

「二十年来の探しのものみつくて本当に嬉しい。いいパパなんでしょうね」と言ううと、ただ「うん、うん」彼も鼻カゼらしい……。

最後にお互に国民学校世代、スジ金入りで育つて来たから物不足だの何だの言つたつたいたいした事ないね。頑張るんだよと昔のお兄ちゃんに戻つていたらけれども。

風の噂も聞かなくなつて丁度二十年経つていてその間ずっとお互の心の片隅に生き続けていた事は、急に想い出して掛けた電話ではない言葉の重さでわかつた。

一度に青春の思いが去来する。

総代で卒業しながら進学できず、小さな染工場で働いて、染料でむらさきいろになつた指で通信教育のレポートを書いていたらお兄ちゃん。

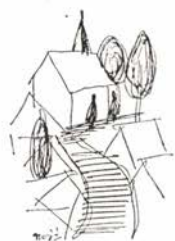
初めてのサラリーで買ってくれた青い薄手の手袋は箱のまま残っている。

ケンカ別れをした訳ではない。一人っ子の私にはその時、東京へついて行く勇気がなかつただけのこと……etc.

かつて路郎先生に特選を戴いた
尋ね人病氣危篤は母の役

という句は私が新聞の三行広告からも、した句、今度は十七文字が大切な青春のかけらをひろつて私のもとへ届けてくれたのである。

S君への 手紙



大 路 美 幸

S君

君の手紙に答えようか、どうしようかと思ひ随分迷った。というのも、川柳に関して私如きものよりも、もっと大先輩がたくさん居られるし、短詩文学に関してても、もっと研究して居られる方がたくさん居られるからだ。勿論、君は先人のそれらの書を、よく勉強されたことはよく知っている。しかし君の手紙は、私に書かれたものであり、君の心は、すぐ前を歩く人の話が聞きたかったのだろうと思ひ、意を決してペンをとった。

S君

川柳の本質については、君もご承知の通り俳諧から発生した前句附が原点であるから、あくまでも、川柳は、庶民の詩である。庶民とは、被支配者であり、大衆である。だから「この芝生踏むべからず」とか、「君に忠、親に孝であるべし」などは、川柳とは言えない。人間に対して、生物に対して、あらゆる森羅万象に対しても、川柳は、下から詠み上げるべきだと思う。そこには必然的に、批判精神とか、ユーモア精神なるものが生れてくるかも知れない。

S君

川柳と俳句の違いについては、昔から、いろいろの人が論じているのは君も承知の通りだ。近頃、俳句が川柳に近づき、川柳が俳句に近づいているので益々それがわからなくなってきた。しかし、どちらも俳諧から生れた日本の短詩文学であることは事実だ。ある意味に於いて短歌だって、外国人などには、川柳や俳句と区別がつかないかも知れない。

しかし、より多くの人の句を聞き、読み、そして創っている川柳的なものは、おのずからわかってくる。勿論、柄井川柳の「川柳の三要素」なるものは基本である。その上に近代川柳には、プラスアルファがある。そのプラスアルファが近代俳句、近代短歌などとなる重なるときがあるからややこしくなる。

S君

川柳は発表すべきものである。いわゆる日記川柳や、寝言川柳や、念仏川柳を絶対に投句してはならない。人の眼に君の作品が触れるとき、なるほどと思わせる何かがなければならぬ。その何かは、真実をえぐり出したものであり、善意から発したものであり、美しさを内蔵したものでなければならぬ。つまり、詩であり、文学であり、芸術なのである。

S君

人間は考える輩である。考えるところに感動がある。感動があれば、ペンをとろう。そして、それを如何にうまく要約出来るかを、

何回も何回も推敲しよう。そして、その要約した作品が最初の感動と一致したら投句して見よう。それでよいと思う。

今までにいろいろエラウことを書いたが、ほんとうは、いちいち川柳の本質だの何だのとこだわっては、君の切角の才能がちぢんでしまふ。何事にもこだわらず、のびのびと作句する方がよい。この手紙も、読み終えたら、破ってくれ給え。君のご健吟を祈る。

時 事 吟

福 浦 勝 晴

倒産続出

お手上げもエスカレートで億三ケタ

倒産を食い物にする整理屋か

失業時代

先きさまは公務員です良縁です

爆破魔横行

イタズラかほんまか爆弾気をもませ

網棚に残った包み気味わるし

舌戦たけなわ

公約は実行されてこそその価値

春眠を揺さぶる朝の選挙カー

目的の選挙演説 鼻につき

蔣介石死去

蔣總統 死んでも共産党は嫌や

地獄の鬼 東洋鬼はど怖くなし

・水煙抄・

秀句鑑賞

—前月号から—

高杉鬼遊

子の鬼も居るだる甘い豆を混ぜ

漫柳

五月号水煙抄の白眉だろう。歌人馬場あき子著「鬼の研究」の一節に「王朝繁栄の暗黒部に生きた人びとであり、反体制的破壊者ともいふべき人々であった」又八吟遊の声を奪って詩の下句を付し、敬愛する詩人の門前に拝札をなして過ぎゆく鬼の心に、常ならぬ心の高鳴りを覚えるもの、じつに、あるいはわれわれ自身が、孤独な現代の鬼であることの証拠かもしれない。Vとあるように鬼そのものは人であろう。故あって鬼になったその子を慈しむ心情縷縷として、ユーモアに溢れている。

浅草がいま暮れてゆく大草鞋

欣一

金龜山浅草寺は一寸六分の観音さんと大草鞋で有名であるが、その界限は音楽娯楽場として昔も今も盛んである。この句の哀感には時代のズレがあるが、丁稚奉公を知っている者には、版画的な温さを感じてゐるだろう。

夢二描く女 夢二の絵と亡び

国彦

前句「浅草が」と同年代的抒情句である。最近の夢二ブームの底流には、高度経済成長に対する反撥もあり、教育ママの女性より、娼婦とした女性像への精神的回帰か。「亡び」と結んであるが断定と思いたくないのは筆者のみならず。

尼の爪はやり女としてのびる

登美也

大東亜戦争従軍中、遺骨の收拾も思いにまかせぬ時の用意に、毛髪か爪を残留部隊に遣し作戦に参加したが、それは人体における不変の部分であった為で、尼さんは既に黒髪とは訣別したものの、爪は過去の延長として今もなおその成長を止めない。爪を切る尼の女ごころを深く挾った作者の眼を懼れる。

何れ巻頭を飾る人である。

明日があるから上役に逆らわず

ますえ

生きることを教えてくれた人が辞め 昭治
現代サラリーマンの悲歌である。自分を殺して明日に望みを托しても、雇われ者には灰色の今日より与えられない。明日へ明日へと鼻先に人參を吊るされた馬が憤懣やるかたなく辞表を叩きつけても傷つくものは常に自分である。幸せなんて誰もくれない。現在の自分の生活の中で何が幸せであるかを発見できない者は、貧乏神よりほえなぬ。

植木市庭あるような顔で見る

寿美子

都会生活者にとって公園等で開かれる植木市は一ふくの清涼剤である。ひとりでもよし、夫婦なれば一層絵になる。真正直に生きて一代で家なんか持てる現世ではない。ロー

ンで買った家には庭なんかついてない。しかし植木市を見る心のゆとりが庭のある顔にさせる。

欲しがらぬ妻に着せたいニューモード

岳麓

男なんて打算的な動物だ。女性に甘いと思われている男も往々にして偽せ物だ。妻はその事をよく知っているから半ば諦め果ては悟りの境地までになっている。永い年月を経ると鈍感な夫も、ふと憐憫の情を催し幾ばくかの出費を覚悟するが、言葉には出さない。

合鍵を渡され度胸ためされる

芳仙

女は鍵を渡して男の度胸をためしたのではなく、それは受取った男の主観である。既に交渉があった故の事で、これから初まるのではない。嘘を真実らしく作った技法を言う。

静かな別離でいつも炎を抱いている

葉子

四句中この一句がヨウコリズムな何時もの語り口。沈潜された情熱は、逢い合う事があつて常に別れる悲しみを抱えている。別れる為に逢いに出掛ける女の哀愁がその人のほえみに翳をつくる。だから男の眼に美しく映るのかもしれない。

売れ残るその値へ鯛の不満そう

世史春

こんなにも切られる訳はないと體

同

魚介類の連作である。活字になったのはこの三句であるが、没の句も拝見したいものだ。今後の句が楽しみである。他の印象句。老齡年金これが金脈とは淋し 宏方
タクシーで来れば列車が遅れてた 一扇



永宗宗義逝く

浜田久米雄

宗義さんが忽然と逝ってしまつた。四月八日入院中の病院から連絡があり、こんどは大分むずかしいからお見舞に来て上げてほしいということでは急いで病院に着いたのが午後三時半であつた。部屋は探しても名札が無く看護婦さんに聞くと面会謝絶の回復室であつた。付添いの奥さんとその病院に看護婦で勤めている娘さんに容態を聞き室内に入つたが眼を閉じて大きな息で酸素吸入をしておられた。これが在りし日川柳を語られた宗義さんかと思われた。しばらくして辞去し帰宅しているとまた病院からの電話で午後四時四十五分亡くなられたと聞き私は絶句したのであつた。ちょうどその日の干潮は午後四時四十分で干潮に人が息を引き取ると言われていたのを思い出し、人間の死が引き潮にびたり来ているのがうらめしく思つた。

宗義さんのことは彼の遺句集「高瀬舟」に書いてるので再び書き下ろす必要もなくその元氣もない。ただ一言付け加えたいのは彼

が昨年十一月に句集を出してからこの方いろいろの川柳の雑誌や句報などで彼の氣に入らない文句があつたり一度どこかで発表した句をまた外の雑誌などへ発表している川柳人があると早速私に電話して来ることであつた。誰がどこの何月号でこんな事を書いてゐる。頼にさわつて困る。あの人はおなじ句を二度も出して川柳の常道に反する。どう思うかと自分の意見に反対する人々にその都度大きな抵抗を感じていることであつた。私はこれとになつて二度ほど病院に彼を見舞い、川柳についての意見は自由であるから、あの人はあんな意見を持っているのだという程度に聞き流すようにしなさいまた同じ句を二回も場所を変えて発表することはもちろん論川柳の常道に反しているが、これはみんなが見ているのでその人の値打ちは下つて来るに違いない。そんなことをいぢいちゃくに障つていては病氣に悪い、あなたの意見主張はあなたとしていつまでも固持すればよいのだからと

わざわざ話しに行ったことがある。

川柳生活十四年の間彼は川柳によって慰められ激励され、川柳に生き甲斐を感じつづけて来た。その情熱が昨年四月七日句碑除幕され、昨年十一月十一日彼の五十八才の誕生日に句集「高瀬舟」を発刊した。一年の間に句碑を建て句集を出した川柳人はおそらくないのではなからうか。これには家族と柳友の温かい思いやりと協力があればこそであつた四月十日葬儀の日は曇り空であつたが多くの川柳人が参列された。読経の後川柳人からの追悼句が十五、六句森本正州君によつて仏前に披露され、弔電がすみ宗義さんの遺体は火葬場へと向かつた。参列者の目の前に

極楽へ行かせて欲しい鐘を撞き 宗義の句碑が厳然と立っていた。参列者は川柳をする人しな人にかかわらずどんな気持ちでこの句碑を眺めていただろうか。これは知る由もない。

彼の遺句の代表作は川柳塔四月号一頁にわたつて載っている。

宗義さん

死を予期してか

不二田一三夫

四月九日、浜田久米雄氏から永宗宗義氏死

すという悲報がもたらされた。入院療養中とは聞いていたが、まさか、こんなお知らせを受けるとは夢にも思っていなかったことである。

昨年四月七日、宗義氏宅で「永宗宗義句碑除幕記念川柳大会」が開かれた。句は、

極楽へ行かせて欲しい鐘を撞き

宗義

である。一年経った四月八日、花まつりの日に宗義さんは亡くなった。

極楽へ一行かせて欲しい——なんといいらしい字句ではないか。——極楽へ行かせて欲しい

あれから三十年

鈴木村諷子

モロタイ島生き残りの元日本兵中村輝夫のことがこの一月ごろ新聞やテレビで賑わせたが、早や三十年の年月を経過したけれど、当時の想い出が新しくよみがえって来ます。

赤道直下「ハルマヘラ」の孤島（四国位の島、モロタイ島はその湾口近くにあり）に在って、昭和二十年八月大東亜戦終戦を迎えたわが部隊は、戦闘任務から解放され、自治作業と復員準備に専念する側、情操陶冶の意味から演芸をやったり、文芸誌をガリ版ずりて出したりした。

偶々私も本部にいた関係で文芸誌「赤道」に随想、短歌などを書いていた。その頃からフト川柳をやってみる気になって、拙いもの

鐘を撞き。行かせて欲しい——を何度も何度も読み返えし、宗義さんのお人柄をしのんだことである。

昭和48年度二賞発表の10月句会に宗義さんも出席した。その日、何かの手違いで、遠來の方々の紹介に宗義さんがはずれていた。これに気づいたのは句会のベージのレイアウト中だった。「悪いことした。とスグその場で宗義さんに謝まる速達を書いた。

宗義さんの雅号は「川柳雑誌」時代から存じあげていたので、このことがあってから文

ながら絵になる川柳などと、私だけの川柳で一頁を埋めてくれたものだった。

句の巧拙は兎も角川柳という形にまとめておいたればこそ三十年後の今日、僅かに手帖の端に書とめたものを拾い読めば、どの句からも島での暮し、気俗風土、戦友のことなど連想されて、懐しさが湧いて来ます。

基石の音草葺小屋の夜が更ける

隊長も尺八を吹く椰子の月

とかげの背キラリみなみの陽をあつめ

名づけたりタコの木電気ホテルの木

慰問劇今宵岬の高射隊

舞台上ほんとうの月指して見せ

無煙釜築けば空にロッキード

椰子の実が寝ているような禿頭に

にしが蛇遂にたおした人だから

手に掬やみなみの海は染りさう

古雑誌活字に餌えた手から手へ

蛇とかげいかもの食いも帰るまで

通をするようになり、「同人句集・川柳塔」へ参加してもらうため同人に推薦したのである。句を選出する時もお手伝いした。そして四月号の「一頁の句集」にも、入院中だったのお手伝いさせてもらった。

句集「高瀬舟」は、今こそ遺句集になってしまったが、百冊を本社へ寄贈され、その売り上げ金を本社の発展費にしてくれと、川柳塔愛のほどを示してくださったのに……合掌（前号柳界展望で三月九日死去とあるのは四月八日死去と訂正します。）

一本の煙草手開い雨をさけ
仲麻呂のホームシツクを椰子の月

禪に星をつけてる舟の兵

水浴の頭の上に気根垂れ

小魚よ何が見たいか木に登る

正月の蜚が小屋を通りぬけ

初心者歓迎

短期速成

費用低廉

内容充実

入会随時

（規則書呈上）

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目

誓得寺内

関西奇術教室

電話大阪〇六四七二二八

環境

斎藤三十四選

環境をほめてセールス腰をかけ
破壊して知る環境の有難さ
青写真環境片が待ったかけ
環境が悪くても住みよい長屋
底辺に環境などと言うとれず
環境が人の心をねじまげる
環境整備抽出の掃除もやっておく
環境のせいにしてはいる不勉強
学習の環境だけではできたけど
女ばかりの中で育って気弱な子
環境に弱い心は右左
環境を直す力は天地人
花街に生まれし才にして名取り
環境の悪さ政治が届かない
環境が変わって喘息遠ざかり
電源のダムに環境破壊され
環境は良いがポンプで水を汲み
環境の汚染漁師を陸に上げ
こはまだ環境もよし揚雲雀
環境の違い友情気に止めず
環境汚染直す努力へ魚帰える
環境がよいだけ足場悪くなり

環境は昔遊郭あったとこ
喜寿近く環境の輪も萎縮
環境は兎も角泥に運は咲き
環境のよさをほめてるバクテリア
環境の匂いを魚屋負うて来る
花見客帰れば塵の山が出来
行楽の環境ならば過疎をほめ
環境の自慢は朝の深呼吸吸
モヤンツビルの谷間でヒョロ／＼と
環境の仇花少年AとB
環境の佳さが左遷を忘れさせ
石油のなまずに環境揺すぶられ
環境に順応をする無精髭
餌付けする環境猿はフト迷い
拗ねている心へ黒い手が伸びる
名利のとなりは派手なカーホテル
三遷の心がわかる学区制
環境を跳ね返した立志伝
環境をその儘持つて来る園児
病む海の環境に耐え桜貝
白壁の団地の色に住みなれて
環境を明治明治に帰えしたく
公害に慣られ過ぎた三十年
環境の死角で百花咲き乱れ
逆境に生きて首席の母子家庭
保護色のまわりにとけて生きる知恵

人

環境をがらりと変えた美人秘書
障害児厳しい環境生きていき
環境保全金が力が欲までが
環境調整という保護司足繁く
剝製の鳩原爆の傘の下
土産物買って欲しさの傘も貸し
小企業傘貸す人の名を控え
野点傘それと云わずに見合させ
迎え傘来る頃みごとな虹が立ち
大傘小傘ずらり整列秋田ぶき
傘濡れを見て雨と知る地下勤務
事故現場黄色い傘が折れたまま
アメリカの核の傘きて平和論
吠えかかる野犬と傘で一騎討ち
宿の傘見せて帰えりの道を聞き
雨風へ傘突撃をする構え
お言葉に甘えて傘は借りられる
宿傘のわけありそうな二人づれ
洋傘で巡る不粋な京の旅

傘

山川阿茶選

破れ傘貸す親切もない昭和 春日
まっすぐに帰ろう駅で傘が待つ 本蔭棒
それとなく迎えるの傘を探す駅 宵明
傘で顔隠して不義理すれ違い バット
拡げても傘に範囲のある防禦 凡九郎
向い風傘が背伸びをしてしまい 祥月
傘かして濡れて帰って妻ともめ 漫柳
この雨に地味の派手のと傘選び 近江
善意傘いっしょが減ってゼロとなり 紫宏
親切の傘に半分濡れていき 弘生
かえられるたんに悪い傘になり 福水
番傘を買って伊勢路の雨に濡れ 静枝
背の子がにぎった傘の柄が重い 保夫
蛇の目傘社長も一役買う余興 道夫
鍵っ子の園児も同じ傘に入れ 正彰
傘さして見上げて惜しむ雨桜 代仕男
すたすたと追越して見る傘の内 佳

しこりまだ解けず横向く迎え傘 右近
母と子の唄がはずんだ迎え傘 重人
幼稚園大人の傘を差したがりがり 伶人
蛇の目傘一役買って地唄舞 豊生
共稼ぎ今日は夫の迎え傘 人
忘れ傘人質にしてバーは待ち 天
蛇の目傘さくら芝居のように散る 宵明

俺と同じやつがこんなに忘れ傘 不二
どことなく舞いの手が出る蛇の目傘 軸

目減り

弘津柳慶選

着くまでに目減りしている花見酒 一風
貨物駅目減りをさせる鳩の群 松花
モニターの目には目減が多過ぎる バット
虎の子も目減り政治へ抱く不信 洋々
あり余る金で目減りは気にかけず 七面山
月掛けはやっと目減りを埋める額 本蔭棒
目減りする世に定年で放り出され 露子
マイホームの夢を目減りが遠のかせ 代仕男
大臣も目減りの被害すこし受け 宵明
賽銭も目減り不況の風が吹き 晩風
主婦連が来れば目減りもない秤 たもつ
抜け目なく目減りを先取る企業 思月
保険金目減り満期が近く来る 隆子
水かけて目減りカバーをする野菜 祥月
人員を自宅待機で目減りさせ 人
目減しておれど貯金を持つ強身 天
老後の虹目減りで一つ消え一つ消え 与史
目減りまで読んで商人の逞しさ 昌道
小遣いの目減り嬉しい孫がくる 昌道

血税の歎きつまま喰いという目減 武雄
年金の目減りがさせぬ楽隠居 伶人
千分の一に目減り満期の保険金 翁童
目減りした愛を支える世間態 香珠夫
目減する預金ダイヤに替えておき 茶人
高度成長その裏にある目減り 曉風
縁談が目減り適齢期を失し 章雅
松茸の目減り見こんだ高値売り 正則
目減する金利を先に考える 季賛
目減する貯蓄で老後のプランたて 登美也
冷凍魚目減りを承知で買わされる 岳麓
故郷から目減りもさせず味噌が着き 一郎
十二分に活かして目減り気にもせず 貞祐
お茶釜の目減りの音のリズミカル 伊津志

目に見えぬ公害寿命を目減りさせ 章雅
玉葱の目減りは軒で芽を伸ばし 茶人
目減りした保険目出度く満期する 宵明
虎の子をインフレ無残に目減りさせ 漫柳
孝行の目減りも含み老後策 人
ヘルスメータ目減りの訳を知っている 昌道
目減りせぬ投資教育ママの夢 香珠夫
年金の目減り遺影へすまぬ愚痴 天
複合汚染生物徐々に目減する 軸
カズエ

初歩教室

題一「言」一

本田恵二朗

言わざるは言葉多きにいやまさる 濁水

お見事な格言である。格言を生み出すには
もろもろの人生体験があつてこそなせること
で、結構なことであるが、格言はあくまで格
言であつて川柳ではない。自分が発見した格
言を基にして川柳に改造して発表しなければ
ならぬことを銘記されたい。

(味のある一と言多弁を黙らせる)

なにとも言葉つつしみおだやかに 秀村

格言とも標語ともつかぬ独り言である。
(つましい言葉に添える片笑くぼ)

言いすぎて損することもあるはずだ 生仏

前句同様に独り言だ。川柳以前である。
(言い過ぎた後味にがく嘸みしめる)

(言い過ぎた後味にがし雨の道)

愚痴も一言二言はよいけれど ますえ
(三言目が愚痴になるからうとまれる)
亡き父は小言が多く怖かった っね
(怖かった亡父の小言をなつかしみ)
無口が言うたつた一言胸に沁み 繁子

(口下手の一と言温う胸に沁む)
板ばさみ言を左右にした返事

(板ばさみ言を左右に振りまわし)
方言がついにとび出た怒りよう

(方言が飛び出すほどの怒りよう)
泣きそうな文字が交つた伝言板

飲みこんだ言葉が胸をそつと撫で
(一言を呑んでよかつた胸を撫で)

言いたげに首かしげてるわけの花
指話と言う静かな話秋の風

言い負けた背中合せが眠られず
口下手のいつも一言言ふ過ぎ

言論の自由を金で買う選挙
言い勝つてもう抜け道のないを知り

こわごとと本心言うてからの仲
大言を吐いてわが身に鞭を打つ

その一言あなたを遠い人にする
お喋りでおしつただけがなぜ言えぬ

(お喋りのくせにオシッコまだ言えず)

京訛りの妖しい糸に絡められ
好きだとは言えない弱気性うらみ

(好きですと言えぬ弱気を自嘲する)
出戻りが見合いをすと言いだした

質屋ではまた頼まれたように言い
義理の仲言うな言うなで育てられ

愚痴言わぬ妻でほんとに助かつた
それから始末を言わそう酒すすめ

(言を左右して逃げ道を探してる)
言左右逃避の道が見つからず

大言を吐く自分を隠し込むように
言語障害ではないんやが その時

保夫

絃

重人

篤史

同

茂美

露芳

同道

同

同

史子

同

同

同

同

同

言訳をするほど訳に輪がかかり

(言訳をすればするほど輪がかかり)
言訳をしてみて後味悪うなり

(言訳の後味を悪うなり)
方言であたためおてる里帰り

言い値みな疑うてみる物価高
言訳をしたが背中が冷えてくる

(言訳の嘘が背筋を寒うする)
多言は嫌いだ我が道を行くばかり

言葉尻覚えられてミニカー買い
(言葉尻つかまれミニカー買われる)

不言実行現代つ子には通じない
言行不一致自己満足の域を出ず

一言居士プラスにならぬ波を立て
言外に匂わせやる気起させる

病篤き人に嘘を言うつらさ
(ガンだとは言えない嘘を考える)

受話器取れば方言強い母の声
(受話器取れば方言強い母の声)

多い一言が酒の座を白らけさせ
(一言と言が酒の座を白らけさせ)

言いが調停者にも出来かかり
(調停役いま言いつ分を見つけ出し)

一言がツとわかつて恋である
(一言と言がツと通じ合い恋進む)

もの言えは貧しい知恵がばれそうで
方言で激励五体に沁み通る

(方言の激励五体に沁み通る)
ためらったあの一と言が悔まれる

遺言を書き置ほどの産もなし
(遺言を書くほど財が無い気象)

頼次

同

静泉

同

紫宏

同

岳麓

同

同

誓二

同

大成

同

露杖

同

同

まとまらぬ饒け言葉嫁く娘に

貞祐

(嫁く娘へ饒け言葉ふとどもり)

同

連れ来た孫の言葉が倍もふえ

同

(久方の孫の言葉が倍もふえ)

慶彦

正直に言えは誰かに傷をつけ

同

(正直に言えは誰かに傷がつく)

同

嘘だとも言えず苦しい逃げを打ち

同

(嘘だとも言えず苦しい逃げ口上)

同

われながら愛想がつきた独り言

同

言質へテアッこっさり回って

同

(うわ言に時々愛しい名前出てる)

本藤

言質へ野党食いついてはなさない

同

(言質にくいつき野党いきり立ち)

三十四

真実を語り肩の荷をおろし

同

(なにもかも言うてしもつた夜の寝息)

多平

言葉では言い表わぬこともあり

同

(口では言えない愛語を温め合い)

同

(言葉にはならぬ愛語で恋進む)

同

言葉尻捉えて質疑の果て知らず

同

言葉数少なくなつて進む恋

同

利美

川柳塔社常任理事会 (4月25日)

5月の常任理事会をハワイ吟行の責任者諸氏の都合で4月25日に急遽変更した。

議題はP22のようにきまった。兼題などはハワイウイロー社の方々と相談の上、後日発表。

他社の方々も本社同人や誌友の推薦で加ねがうことにした。

失言を言葉の綾と悪びれず

同

当てこすりさまじい姑の独り言

同

弁解の言葉尻まで咎められ

同

色々な方言乗せている夜行

同

(国訛り囀るようにローカル線)

同

言いそびれたのに恩に着せられる

弘生

言うとか馬鹿にされるとハッパかけ

同

(言うとかなみくびられまっせ言いはれ)

無人

手を合せお礼の言葉探してる

同

ぎこちない酌を無言の笑みで受け

同

緊張の方言も出る歓迎会

翁童

(方言の笑顔が囁く歓迎会)

同

(そろそろ酔ったぞ大言壮語が始める)

同

うっかりと言えは古いとはね返る

サヨ

(うかつには言えぬぞ古いと言われそう)

同

明日がある一言控えて今日終る

同

(明日があるから一言を吞んでおく)

同

あらあらし言葉をとつと裏返えす

同

(荒っぽい言葉の裏にある温み)

同

やることは子供 言うことは大人

同

頼みごと息子に言わす胸の中

同

路郎忌は時間の都合で席題なしにした。P22をご参照。

出席・多久志・静馬・柳志・百酒・形水・小松園・栗・薫風・一三夫諸氏。

日川協コーナ―

日本川柳協会創立記念・高知県川柳大会は6月15日11時から、高知公園内県立図書館を会場にして会費は三百円。宿題は「先頭・宮

(頼みごと子に言わせてる妻あわれ)

伊津志

他言せぬことの苦しさよく分り

同

(他言せぬ約束破けさよ破けそう)

同

言外に思いをこめている瞳

同

(一言を添えたいらしい目の動き)

同

一言が多い課長が来るそう

カズエ

失言を虎視たんと待つ野党

同

(失言の拾い屋ずらりと野党席)

同

片言の通じる一幅母子像

同

(片言の対話が絵になる乳母車)

同

小言いう母にくめない小言が国訛り

同

(嬉しさは老母の小言が国訛り)

同

老夫婦一言言葉もなきままに

同

(言葉を忘れてたように老夫婦)

同

日向ぼこそばの犬に言葉かけ

同

(愛犬と対話のどかな日向ぼこ)

同

題一取 六月二十日締切 (八月号発表)

同

宛先 倉敷市下津井一―九一三四七一一

同

本 田 恵 二 朗

同

本時彦選「飾・川竹松風選」「太鼓・横山

同

青果選」「集まる・櫻谷桂緑選」「恩人・岡

同

村嵐舟選」「万歳・奴田原紅雨選」席題2題

同

は当日発表、投句拝辞となっている。

同

講演「明治以来」堀口塊人氏(川柳文学主

同

幹)がきまり、中島生々庵氏(川柳塔社主

同

幹)も出席の予定。(五月七日現在)

同

主催は高知川柳社と帆傘川柳社。協賛は日

同

本川柳協会。後援はNHK高知放送局ほか。

同

加ねがうことにした。

同

第二百八十七回（五十年度第五回）

大萬川 柳

「裏」 入選発表

選者 川村好郎
投句総数 六百十五句
入選 七十八句

憧れの目には裏まで読み切れぬ

大 阪 十止庵
札束のノックで裏口開きます

東 大 阪 美 子
今だから話すと戦時の裏話

大 阪 金 三
裏口は庶民に重い扉なり

標 千 万 子
裏表なさすぎ味気ない夫

和歌山 としよ
裏切らぬ握手温みが通い合う

神 戸 静 泉
医科大の裏口大きな口を開け

大 阪 誓 二
その日ぐらしに裏も表もあるもん

宝 塚 静 馬
裏口を知らない父のちびた靴

倉 敷 梁 水
裏知っていて合腿も忘れない

豊屋川 小 路
脱税の裏教えます本を買い

今 治 有 里
立志伝に書いてなかった裏話

大 阪 文 秋
幼稚園までが裏口あるという

倉 吉 弘 朗
裏付けが欲しいある日のレントゲ

堺 緑 水
親切に裏があっても乗ってみる

鳥 取 紫 宏
裏道はあるいた女にある温み

大 阪 柳 信
耳よりな話やっぱり裏があり

大 田 軒 太 楼
裏すぐに見抜く女で渴いている

富田林 美 代
悪い虫ほど葉の裏に身をかくす

岸和田 逢 春
大ヒットしたのはレコード裏の方

大 阪 度
手の裏を返したように効くチップ

大 阪 一 栄
裏のない一途な父で貯金せず

八 尾 美 幸
六法の裏も嘔って妥協せず

大 阪 柳 志
裏切った片目ダルマに睨まれる

もう少し話してほしい裏ばなし

兵 庫 近 江
叱られた言葉の裏にある温み

大 阪 ますえ
九回の裏に似てきた我が人生

西 宮 多久志
裏側も知らずスターの座にこがれ

大 阪 雄 峯
嫁姑言葉の裏をさぐり合い

和歌山 ユ キ
大臣の視察その裏見ずに去に

豊 中 セツ子
裏道は思わぬところで行詰り

鳥 取 洋 々
裏表に馴れて自分を見失い

高 槻 季 賛
戦いのない裏町で壁はない

八 尾 弥 生
裏ばかり見すぎたひとの不倖せ

貝 塚 つき子
札束の重み裏門軽く開き

大 阪 ますえ
裏話聞かせて左遷をふくめられ

大 阪 ますえ
裏はらなのお世辞と知りつつ酌を受

大 阪 ますえ
裏表ないと信じてきた夫婦

大 阪 ますえ
裏があることを知ってる聞き上手

大 阪 ますえ
裏話尾ひれが尤もらしくつき

大 阪 ますえ
裏おもて知る忠告の語がまるい

寡婦せめて裏地におんな残す紅

裏地までほめて新調値踏みされ

大 阪 あいき
尼寺の裏で炎えてる簀簾

大 阪 あいき
裏付けが欲しくて女目をつむる

大 阪 柳 宏子
裏口に馴れた歩巾に音がな

大 阪 柳 宏子
その裏を見抜いた男喋らない

大 阪 柳 宏子
裏のない言葉よい方へさとり

大 阪 柳 宏子
仄血は口裏合わず話聞く

大 阪 柳 宏子
調子合わせすぎて裏書たのまれる

大 阪 柳 宏子
泳がせておいて証拠を裏付ける

大 阪 柳 宏子
筋書が読めてる裏にさからわす

大 阪 柳 宏子
裏方のもひとつ奥に妻すわる

大 阪 柳 宏子
朗らかに見えて家ではけむられ

大 阪 柳 宏子
栄光の歴史の裏は見落され

大 阪 柳 宏子
裏切った人にこの子が生き写し

大 阪 柳 宏子
柩から異議が出そうな裏話

大 阪 柳 宏子
裏切りを責める言葉が見当らず

笠岡 白梅子

費い込み裏であやつる糸があり
舞台裏ひそかに策を練る一派
裏街道行っても月がついてくる

松江 登美也

札束で心の裏が透けて見え
裏のある酒と氣付いてから酔えず
うますぎる話の裏を考える
同業を探る値札が裏返り

神戸 牧人

この涙鏡の裏へかくしとく

八尾 夕花

小細工の尻尾裏から見えていた

八尾 弥生

如才ない笑いの裏にある打算

笠岡 白梅子

子を思う母の便りに裏はない

八尾 美幸

人間の裏を酒席でのぞかせる

笠岡 忠三

口裏を合わす電話に湯ざめする

豊屋川 小路

信頼の絆に消えた裏表

松原 重人

天ノ句

東大阪 美子

同情の裏に優越感をもち

選者 吟

ごゆっくり言葉の裏と氣がつかず

昭和五十年年度

ベストテン(四月現在)

一	可住	二、〇	兵庫	二一	小路	七、〇	豊屋川	二三	どんたく	五、〇	神戸
二	好一	一、五	堺	一二	花梢	七、〇	富田林	二四	宵明	五、〇	今治
三	つき子	一、〇	大阪	一四	吸江	七、〇	藤井寺				以下略
四	弥生	一、〇	貝塚	一五	洋々	六、五	富田林				
五	あいぎ	一、〇	大阪	一六	維久子	六、五	西宮				
六	牧人	一、〇	神戸	一七	多志	六、〇	大宮				
七	白梅子	八、〇	神戶	一八	柳志	六、〇	神戸				
八	美幸	七、五	岡山	一九	静泉	六、〇	東大阪				
九	幸	七、〇	八尾	二〇	美子	五、五	大阪				
一〇	美幸	七、〇	八尾	二一	柳宏子	五、五	大阪				
				二二	十止庵	五、〇	松江				
					登美也						

▼傍島静馬氏の本社句会出席美談

静馬さんの二十二年間連続出席は
本邦柳界の誇りとされ
ているが、五月七日の
交通ゼネストにも出席
されたのである。実は
その前日、氏から電話
があつて、以和貴荘へ
泊まり込むつもりだと
のことだつた。

一分間の柳論

動く句、動かぬ句と云う事をよく聞く。
しかも川柳句に於ては、天王寺でも、一心
寺でも、どちらでもよい句は動く句、天王
寺でなければならぬ句は動かぬと、その通
りである。
しかし、動く動かぬは川柳のみの世界だ
けでない。短歌、俳句にもある。永年作句
の人にも動く句を採っている入選作を見る
事がある。選の仕方の在り方にも問題があ
る。要するに動く動かぬと云う事を聞くと
私は直ぐ笠置山頂の「ゆるぎ石」を思い出

八木摩天郎

す。大きな石と石との間の大きな石が動
く。動く筈である。石と石とが、くっつい
て居ないからだ。動くのも道理である。
大楠公の指先一本で釣鐘を動かした話、
釣鐘は動くもので無いにしても、釣鐘が、
その反動で、即ち釣鐘自身の力で動き出し
たら動く。川柳、俳句、短歌の世界でも、
適確なる意味の文字を適確なところ、中
七、下五に使うか使わないか。推敲して表
現に、誤りなき字句、類推して一番適切な
表現で、発表して悔なき句で無ければなら
ぬと私は思う。

た。これにはこちらが驚いたこと
だが、結局は宝塚から西宮の多久
志氏宅まで徒歩で二時間余を強行

し、多久志氏と共に車で出席され
たのには脱帽！
(F)

昭和五十年年度第七回
「疎遠」五句以内
締切 六月二十五日
第八回「比べる」五句以内
締切 七月二十五日
投句先
〒590堺市堀上緑町一の三の七
藤井一二三万 大萬川柳係

柳界展望

(原稿締切毎月末)

せくください。

▼第3回ふあうすと賞と紋太賞がきまつた。ふ賞は荒木秋栄氏の「母なる黄色絵の具皿から菜苗へ」ほか4篇。紋太賞は天根夢草氏の「風呂の湯であたまを洗うかゝる刑」ほか4篇。

▼一九七四年度第7回周魚賞受賞作品は第一席「この人も善人と知る隙だらけ」鈴木柳芳。第二席「息切れのした石段のいい眺め」藤島茶六。第三席「自分には無いものがある無二の友」赤松喜美子諸氏ときまつた。なお川柳きやり吟社発行の「川柳きやり五十五年史」は発送中(別掲参照)。

▼東一步氏(岡山県)が句集「筏」を出された。氏は49年岡山県文学選奨受賞者である。長嶋愛生園に入所。などの字句が心を打つ。

「岩礁をゆきさる浪の白刃研ぐ」送料共三百円。発行所岡山市津島東四丁目一八八三〇一〇川柳岡山社

▼第10回静岡県川柳大会は6月15日11時開催。会場は静岡宮ヶ崎町浅間神社前ブリンズ会館。魚磯5階。会費千二百円。宿題「持ち味・本意・入れ知恵・誤算・野性・女神・炎・隠れる・

ばらばら」席題3題。投句は20円切手25枚同封。▼420静岡市大岩六五四ノ二朝倉太郎方。

▼大津川柳同窓会(6月6日8日)(本社関係の出席者は、大八・小松園・若人・栗・水車・日満・宵明・太・津・と金諸氏。連絡先は〒670姫路年北条250大井正夫(電姫路局0792212333)。

▼第18回近県川柳大会は9月7日(日)9時から竹原福祉会館(予定)で開催。

▼鈴木可香氏(名古屋)字奈月から旅信拝受。ピール一本を五人であけましたと。

▼池口吞歩氏(国立国会図書館勤務)から「国の文化財として永久保存のため出版物は納入してほしい」とお問い合せは〒1100東京千代田区永田町一〇〇一〇一、国立国会図書館収書部国内図書課。

▼下村梵氏(新潟市武玉川文芸社)から「武玉川廃刊の苦衷をのべた挨拶状刊行受。」「武玉川原本復刻発行などの夢があり振替口座はこのまま残しておく」とのこと。

▼三浦太郎丸氏(七六歳)が3月25日逝去。氏は関東柳界の重鎮として知られ、昨年12月23日に急逝した榎田竹林氏とは大の仲よしだったと「静岡川柳」の柳葉女氏の四月号の巻頭文にある。合掌。

▽同人の動向△

▼北川春泉氏(枚方市)から「四月の京都の医学会へ出ましたが、かなりくたびれ、まだまだ一人前の仕事ができません」と。

▼川村好郎氏(高石市)は五月五日、中尾藻介氏の依頼で京都の事務所で開催された多大な感銘を与えられた。

▼伊藤茶伝氏(小松市)は北国新聞へ火曜日ごとに「いしかわの柳人たち」を執筆。4月15日の第14回で完結したが、その快筆が印象的だった。なお春の叙熱に煎五等双光旭日章の榮に輝かれた。

▼尼緑之助氏(出雲市)は3月に二長男を亡くされたが、5月11日には末の坊ちゃんが出雲大社で結婚式を挙げられた。花嫁は仙台の人。おめでと。うございます。

▼小西無鬼氏(兵庫県)から「四月は結婚式が三件、遠山可住君が西脇市の呉農改善及所へ副所長として榮

転などで「ささやま」の編集や印刷などに少しく困ったり、わが篠山分会が県から表彰され受賞、分会長として出席したりとんやわんやの四月でしたと。

▼月原宵明氏(今治市)が参謀格で応援された社の役員、また愛媛県川柳文化連盟会長仲川たけし氏も当選。

▼河村日満氏(鳥取市)四月号大萬川柳大会の記事中主幹の柳話のころをさしむじみ拝読、このような柳話を聞ける人々をうらやましく思う。六十にして迷うてゐる。六十にして迷うてゐる。六十にして迷うてゐる。

▼藤田軒太楼氏(大田市)は中村雷音坊氏らと大田川柳会を旗上げ結成。

▼岸南柳氏(大阪市)の米寿祝賀会が4月28日に自宅で開催、盛会だった。なお米寿記念として金一封を本社へおくりされた。

▼菊沢小松園氏(大阪市)は隠岐合同句会の集合時間の錯覚から欠席。岸南柳氏の米寿祝賀会へ一句「うれしきは米寿の会に叱られ」小松園。

▼麻生霞乃先生から「奈良の新緑も藤もさぞ美しかろうと思つていますがエネルギーの無駄づかひをしないようにしています。」

▼エリザベス女王の来日と交通ゼネストがカチ合った五月七日の本社句会は、それでも五十余名という盛会だった。

▼第28回新潟県川柳大会が6月22日10時から開催。会場は新潟市程島、新潟市民会館ホール。宿題「体温」「正敏選」「決め手」茶六選「坂道」富二選。雑詠は具里院選、夢の助選、風柳選、講演小野為郎。席題4選、第6回川上三太郎賞。第1回白石朝太郎賞表彰。会費八百円。投句参加は6月15日までに二百円同封。▼956新潟局私書箱15号柳都川柳社へ。懇親宴(一泊付)などお問い合わせ

庵主幹がご出席予定とのことと楽しみにしております。同人の窓花、美知さんら必ず出席します。川柳高知49年度合本をお送りしました。

▼藤井明朗氏（島根県）から6月22日の島根県川柳大会へ好郎先生を迎えますので大ハッキリですと。

▼塩満敏氏（羽曳野市）は去る日、上六付近の古本屋で「川柳雑誌」の創刊号から全部と「土団子」や「後の葉柳」などを手に入れた。故橋本緑雨氏のものではないかと想像され、同じ交通局川柳会の先輩後輩だけに何かそこに因縁めいたものが感じられた。

▼島居百穂氏（西宮市）は本誌広告へ協力されているが、春と秋にはフランスの取引先きの外人が来日、それには毎日付添っているため理事会も欠席しました。

▼弘津柳慶氏（柳井市）は4月26日長女が女子出産、おじいちゃん。5月24日には長男が結婚。めでたいやら忙しいやら。

▼大江秋月氏（兵庫県）は部落副総代に選出され、老人会を招待して春の運動会

開催などで四月は多忙だったとのこと。

▼村田瓢太氏（守口市）は4月17日夕刻、守口駅の階段で足を踏みはずし後頭部を打ち失神、門真市の安井病院へ救急車で運ばれたが経過は良好。まだちよつと早いと姪婆へ返えされる瓢太。

▼山田季賛氏（高槻市）は4月24日米社、25日から職場復帰の元氣な顔を見せてくださった。

▼本多柳志氏（大阪市）は時事川柳がお得意だが、それもしそのはず三行コントの名手である。大阪・省三とあるのは柳志氏の筆名である。

▼不二田一三夫氏の前号後記にある夢二の記事中、有本芳水の件について、河野春三、堀口塊人両先生から懇切なるご教示をいただいた。

▼永尾英断氏（兵庫県・理事）がスト中の大阪市内で五月八日夜交通事故に遇われ、北區浮田町の行岡病院で十日死去。合掌

▽旅 信△

▼隠岐合同句会は松江と大阪が結ばれ五月一日から五日まで柳趣に富む三十数名

の盛会だった。（詳細次号）尼緑之助氏（出雲市）と八木千代さん（米子市）が途中出迎えられた。

▼福田丁路氏（高槻市）は三月末で職を離れ、気ままな生活を楽んでおられる。4月11日から二泊三日の旅先から「公害を知らぬ緑の徳岐対馬」丁路。

▼八木摩太郎氏（堺市）は3月24日から四泊五日へ靖国神社、箱根、甲州路の旅に千乃子、茂美、柳影、徳子皆さんが楽しめた。

▼中川晃男氏（松江市）4月6日宇佐八幡宮の近くへお嬢さんが嫁がれ、ついでにご一家で長旅をされた。

▼橘薫風氏（豊中市）から「新幹線に乗るとあつという間の九州なのであつけないことです。長い間の念願の地なので熊本、長崎、平戸などへ回ります。

▼戸原静歩氏（守口市）町内会の有志と白川郷の見学へ来ています「春寒の合掌苑を見てまわり」静歩。前号訂正「P10の山川阿茶さんの句は「親の顔みた子ばかり日曜日」

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



大阪・東京
大丸
京都・神戸

▽6月の句会△
▼菜の花句会—十日六時—会場—西郷会館（八尾神社境内）題—満員・髪・甘い本。
▼南海川柳会—十九日—題—覚書—おおらか—バラ色
▼大阪川柳会—二十日六時—会場—大丸（松崎町）—題—接近—標本—衣—トリック。
▼川柳東大阪—二十八日六時—会場—東大阪市中央公民館第二集會室—題—波紋—資金—くじく—ロビー。

本社 五月句会

会場 以和貴莊
七日 午後六時

ようこそエリザベス女王と、またこそ交通ゼネストの五月七日句会は、明かるさと暗さの双曲線。

このような悪条件に五十五名の出席は皆さんのご協力によるものである。川狂子氏がよく云われることだが「川柳塔の句会は気分満点ですわ」

川村好郎氏の欠席で若本多久志氏が柳話のピンチヒッターとして起たれる。「本音と建て前」と題され、イザヤ・ベンダマンの「日本の商人」を経営マンとして語られた。著者は日本人よりもよく日本人を研究している作家で、大宅壮一ノンフィクション賞第二回受賞者としてあまりにも有名である。

歌舞伎「勸進帳」の関守富樫と弁慶の腹芸などは、義経と見破られているのに、それをゴマ化そうとする、本音と建て前を石油ショックや交通ストにまで発展させ有意義なお話だった。

P53でちょっとふれておいたが、宝塚から静馬氏が徒歩二時間余の西宮の多久志氏宅まで行き、多久志氏の車に同乗してスト句会へ

出席された。

月間賞は不二田一三夫となる。(F)

(本年一月句会から四月句会まで全出席の方々が交通ゼネストで五月句会を欠席されたのは不可抗力として出席にします) — 句会部

(進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊)

出席—与呂志・敏・多久志・世山・緑水・静馬・滋雀・一三夫・喜風・柳宏子・凡九郎・正彰・花梢・肖二・綾女・天笑・一舟・弥生・美幸・鬼遊・生々庵・牧人・いわを・形水・素郎・文秋・維久子・醉々・幸生・夕花・三十四・一扇・川狂子・亜成・博泉・十止庵・吸江・度・儀一・鶴声・岳人・鎮彦・庸佑・つき子・雀踊子・小松園・慶之助・南柳・柳信・恒明・あいき・君子・薫風・一二三・葉子。

席題「貞操」

神谷凡九郎選

真赤なワインに貞操沈んでる 夕花
かたくなな女の貞操アクビする 夕花
恋一貞操かすかに揺れている 夕花
中ピ連男の貞操売りにくる 幸生
セックスと別に貞操論をもち 柳宏子
貞操がゆらぐ仏壇開けておく 十止庵
男ぎらい貞操惜しむわけでない 静馬
長持ちに貞操入れて行きましょか 岳人
貞操を抱きトンプル言っている 醉々
ああ貞操女がブツブル言っている 美幸
蝶が止まった花が貞操盗まれる 天笑
貞操が夢で他人を夫にする 鎮彦
貞操を下さい風呂敷持ってくる 岳人

席題「速達」

笠原 吸江選

速達で断ってきたプロポーズ 天笑
書留も速達という親心 緑水
速達でも未だ心配な願書出し 幸生
絵葉書を速達で出すハネムーン 一扇
速達の求婚ポストの音となる 柳信
速達へ人生賭けている若さ 美幸
速達で消印だけを間に合かし 鎮彦
請求書は速達受領書は普通 恒明
速達でもところあるうに奉賀帳 庸佑
速達で急いぜスチャー見せただけ 多久志
せっかちはすぐ速達で出したが 小松園
速達で路傍の人となる返事

遺句集となった

永宗 宗義 句集

「高 瀬 舟」

送料共 三百円

ストライキすむまで速達眠っている
 速達は来て派手になる下宿人
 速達は古稀のお祝い酒の券
 じり込みセーフの速達当選し
 速達で無心速達で断わられ
 速達でせめて反抗してみせる
 速達に合格の文字確かめる
 速達の待つ身になって出す便り
 速達で来た友情の有難さ
 速達できたにゆつくり塗っている
 何でも速達へ社長の目がひかり
 速達にせよと運配でおびやか
 速達が普通といっしょに着く辺地
 神棚に上げて速達おがまれる
 速達の切手をはって入れ忘れ
 速達で出せばいつでも効く無心
 速達の熱意あふれている投句
 迷うた末の返事とわかる速達便
 速達で遺書が届いたあわてよう
 速達の中身は追伸で埋まり
 速達へ男の喜劇はじまりぬ
 速達へ凡足のしがしびれた
 速達と言うのに留守の日に届き
 入試パス速達開く掌のふるえ
 本人より速達便があとに着き
 ぎりぎり速達で出す筆不精
 速達が遅れ人生狂わせる
 速達で来た詫び状に心澄む
 速達がストの渦中に巻きこまれ
 速達へまたかと親父驚かず

静馬 綾女 生々庵 一三夫 恒明 三十四 滋雀 儀一 十止庵 度秋 文馬 静馬 花梢 生々庵 維久子 肖二 牧人 一三夫 弥生 雀踊子 雀踊子 文秋 喜風 生々庵 牧人 綾女 多志 久志 一三夫 吸江

兼題「岬」

岩本雀踊子選

岬からクナシエトロフ戻ってこい
 死に來て岬の花に叱られて
 別れ惜しむ岬にさびしく佇つ孤独
 何もかも忘れ岬の青に佇つ
 人生の岬に立った風当り
 いっからか窓のすて場となる岬
 泣きに叩かれ岬に遠く流れ星
 台風に即かれ岬は細うなり
 漁夫の墓遷らぬ岬へ背を向ける
 岬まで相当の距離やめておこ
 岬が見えると舵が軽くなる
 岬には安全祈る灯がまわり
 清潔な岬神話と海鳴りと
 酔々

亜純 翁童 祥月 登美也 一栄 好一 好一 曲ん手 曲ん手 日満 度敏 醉々

青春を白く白くする岬
 バカヤロウ一言いいに來る岬
 夕映えの岬に未練を捨ててくる岬
 岬の旅館でトンカツ食わされる岬
 台所が変る岬の電子ジャヤー
 船待つ心へ岬呼んでくる岬
 訪う人に民話が聞こえてくる岬
 フェリー今岬へかかる気笛吹き
 岬の下で鯛は行方を思案する岬
 肌さらす岬の風に嘘はない岬
 学校が一番遠い岬の子
 陽が落ちて岬神話の風を聞く岬
 何となく飽一つて來た岬
 民謡の岬は合い憎く雨ばかり
 流水が南の旅に出る岬
 醉々

夕花 鬼遊 肖二 天笑 いわを 柳信 一二三 思月 天笑 美幸 夕花 維久子 花

雅号ぶつちやけばなし

(140)

みゆき



おおじ

大 路 美 幸

父の名は美則(みのり)。この父が、
 姫路の歩兵第三十九聯隊に入隊中に、私
 は、加古川市郊外で生れた。祖母は、女
 の子のような男児出産と伝えた。父は、姫路市の御幸
 通りに因んで、美幸(みゆき)と名付けた。川柳を初
 めるとき、雅号を考えたが、どうしても気に入る名前
 がなく、それと、恥かしながら、美幸ちゃんと呼んで
 くれた(単数)に発見して貰いたくてそのまま雅号と
 した。しかし、私のリルは、まだ私が川柳をやってい
 ることに、気付いていないらしい。

少年になってナツメロらずさむ

美 幸

(職業・衣料品小売)

昭和五年四月二十日(四十四歳)

帰り船岬を回るじれったさ 儀一
灯台の棲家岬の零番地 曲ん手
岬から花束なげた影法師 雀踊子

兼題「昔」 傍島 静馬選

古本の市で昔を漁る顔 どんたく
五厘で飴玉買ったよき時代 誓二
一と昔前は魚も釣れた川 右近
その昔もてた男の背がまろし 登美也
思い出は昔のままの田の小道 翁童
住宅難昔は思いもよらぬこと 一榮
昔にはない男美容師芸ボーイ 亜鈍
夢抱く青年昔を口にせず 吸江
華やかな昔を偲ぶ鬼瓦 柳宏子
成上り昔を語ればボロが出る 曲ん手
望郷の緑は昔のまま残り 一二三
真面目とも昔人間とも言われ 一三夫
一昔前の俺なら口説いてた 緑水
過去帳をくれば大小差した家 多志
昔から家訓守って来たしにせ 文秋
「むかし昔」そんな話じゃ子は寝ない 一三夫
昔から五十鈴の流れ神々目 一三夫
飲めばまた昔の愚痴が出る落ち目 一二三
ラブレター昔はきれいな相聞歌 一三夫
人氣者脚色された過去を持つ 恒明
昔なら泣いたさわりで笑い出し 度
子の理屈昔ばなしを混ぜかえし 君子
むかしからそうやと理屈ぬきで押す 日満
昔からちつとも変わっていない癖 亜成
煙突のけむりも昔は喜ばれ 素郎
髭みても昔の人は偉かった

一分間の柳論

鈴木村 諷子

昔軍隊で射撃の演習の時「眼心指の一致」ということを上官からやかましく言われたものでした。私はこの教えは川柳の道にも、相通ずるものがあると考えます。即ち眼とは川柳のヒント若しくは着眼で、心とは想、つまり作者がその着眼をどう受けとめたかにあたると思う。最後の指とは作句技巧、推敲に推敲を重ねてどんな形の句に仕上げるかに相当

するとと思う。この川柳の眼心指がうまく一致した時に於て、会心の句が出来上るのではないかと私は考えます。

最後に私は川柳は思索なりと信じています。凡そ思索を持たない人生ほど荒涼たるものはないと思います。あらゆる欲望も、生活も忘れて作句三昧境の思索に没する時、人生最大の愉悅を覚えます。

兼題「さしがね」 西 いわを選

昔なら三くだり半で形がつき 緑水
百円で芸者遊びも出来た頃 多志
昔から何んとかなりそでならぬ金 静馬

さしがねを見ぬく鋭い感をもち 登美也
さしがねの手足にあって損をする 祥月
ここ迄はさしがね通り運んで来 一扇
差し金が意外なところで役に立ち 鶴声
有難たいさしがねだとは気が付かず つき子
さしがねと解って今日は負けておく 曲ん手
さしがねの通り尻尾を出した犯人 綾女
さしがねへ女に光る針がある 雀踊子
さしがねの出た黒幕は知らん顔 柳宏子
さしがねが天使のような女だと 酔々
さしがねの畏へ落ちていた女 雀踊子
奥さんのさしがねらしい祝鯛 素郎

さしがねをされた事まで子は喋り 多志
誰れのさしがねか冷くなってきた 思月
父と母いてのさしがねがくい違い 庸佑
さしがねの通り運んだ会議室 庸佑
さしがねに男一匹動じない 酔々
黒幕のさしがね通り動き出す つき子
順法と言うさしがねに怠けられ 小松園
悪知恵の働くさしがねに繰つられ 吸江
さしがねと判って急に強くなり 雀踊子
さしがねに女の顔が二つある 文秋
さしがねで動くロボットに成り下り 滋雀
騙されてやるさしがねの酒に酔い 一三夫
妹のさしがね姉の恋実る 三三夫
さしがねが種切れとなり一人言 生々庵
ベトナムが居るさしがねの無責任 美幸
正直に子供留守は使われない 一扇
さしがねはうきの動きに目をこらし 度

神サマの差しがね連休雨にする 鬼遊
さがねで動く男に骨がない 好一
さがねの通り大学入試パス いわを

兼題「空き缶」

大坂 形水選

飲み足らぬ顔が空き缶振って居る 右近
善人の怒り空き缶蹴っただけ 好一
空き缶を生かしトイレが美しい 日満
空き缶がごろんごろんとパスの旅 どんたく
空き缶が散らばり独身寮は留守 思月
空き缶の悟りは土に化さんとす 弘生
カラフルな空き缶少女の目をとらえ 翁童
空き缶も器具の一つになるキャンプ 一栄
失業にふと空き缶を踏みつける 亜鈍
空き缶の中で虫鈴甦えり 亜鈍

道しるべきながら空き缶つづく怪 静馬
雪山の悲劇と空き缶しゅべり出す 雀踊子
空き缶に帰りは蟹の子音を立て 小松園
ハイカールのマナー悲しき缶の山 牧久志
空き缶へ溜まりアルム貨死んでいる 多志
空き缶のメーカールなぐりたくもなり 喜風
空き缶を蹴れば回収の音がする 正彰
派手なデザイン空き缶のまき耐えている 生々庵
空き缶の音が混って風唸る 亜成
空き缶の音がめだかの生徒がつれ去られ 滋雀
空き缶の音が案山子の耳につき 天笑
空き缶も場所ですりこわがらせ 一舟
明日がない空き缶のそれっきり 生々庵
空き缶に市政の届かぬゴミを燃し 滋雀
空き缶で絵筆を洗うひとり旅 天笑

雅号ぶつちやけばなし

(141)

しめじよ



藤村メ女

ふじむら

夫が復員して帰り、疎開先の笠置へ路郎先生御夫妻、
本宅の兄夫婦、女流画家の生田花朝先生、詩人の小野
さん、安西さんなどお越しになり、夜句会が始まり
俳句と川柳だったと思ひます。其時私にも作るよう云
われ、お仲間入りして俳句と川柳の違いもわからぬま
まに作ったのが、「この道は奈良と二つについて野菊咲
く」どうせいな水引だけの記念品と二句抜けて句箋に
メ女と名を記して下さいました。私はメ女なんて年
寄くさくていやだあとと思ひながら、それからブツツ
リ句も作った事もなく、子育てに追われる十年、二十九
年に大阪へ出て来て先生に進められるまま婦人友の会
へ仲間入り、今にいたりやとメ女が好きになりました。

明治四十五年生れ八人の孫があります。

ラバさんを踊る空き缶腰で鳴り 三十四
空き缶の虚ろな音よ定年よ 美幸
空き缶が五月の風に少し拗ね 生々庵
空き缶を城にほうふら二、三びき 一三夫
なんということなく空き缶ためている 形水
(河井庸佑・整理)

★

川柳後集(各地柳壇追加)

柳五郎報

金槌でたたいてやりたい石頭 柳五郎報
腕のさへ釘金槌の思うまま 天竜
金槌へ釘も出たまま拗ねてみせ 柳五郎
棺打つ金槌となり音乾く 柳五郎
燃えるのも今宵限りの一夜妻 柳五郎
もう燃えぬマダムちゃっかり貯めている 柳五郎
燃えている女張りのある身のことなし 柳五郎
筋論をとおし若さが燃えている 柳五郎
情熱を燃やし僻地の医師で生き 柳五郎
入社式希望に燃えた夢があり 柳五郎
長髪が流行って喜ぶ不精者 柳五郎
飛行雲みたいだ単車のロングヘア 柳五郎
長髪に一笑された小さき善 柳五郎
長髪を明治の尺度で叱りつけ 柳五郎
燃えつきて老らくの窓にある洪さ 柳五郎
花見とは言いわけだけで花も見ず 柳五郎
嬌声がまだ聞こえてる花吹雪 柳五郎

北川 春 巢 著

随筆と「聴診器」

送料共 千円

老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳ささやま

河原みのる報

今様にのれんが変る自動ドア
洗濯のれんぐぐぬて出る笑顔
包丁でのれんに恥じぬ玉を縫き
肩巾でカチカチと鳴る珠のれん
篠山ののれんで猪の値が生れ
それぞれを一ト役老けさす呱々の声
産声は家族和合を引き受けて
待ち兼ねた産声廊下で父になり
産声に皆んなの力どつと抜け
産声へさげて来たかと先ず聞かれ
それぞれの国語で名来る呱々の声
二人仲先手打たれて親が折れ
先手まず取らせて次の手を探り
先客へ玉露のお湯が熱つ過ぎた
珍客へ玉露のお湯が熱つ過ぎた
お点前とかしこまられて胆冷やす
児の寝顔迷いに迷う仲人口
久闊と話し昔を掘り返す

押ピン
手ほどきのうまさ
手ほどきをうける十指をあたためる
手ほどきがもう白で手ほどき口を入れ
ブライバシーまで

金井
文柳報
近江
淡合子
宗水
無鬼
宗水
とんぼ
つや子
み雨
喜美代
越山
一好
孝住
可子
れい子
とよい
素水

けもの道神話は草の蔭にある
神話とかほえましくもなるボルノ
八頭のおろち怪獣として話し
満州の神話は夕日と赤土と
神話から大和と三山明けて来る
余韻ほのぼの神話にねむらされ
歴史塗りかえても神話なお光り
村人の神話素直に受け継がれ
紫の霞が降つてくる神話
京へ来て上り下りの道を問ひ
テキストをいっそ漫画にして見たら
テキストにないおふくろの味が好き
独学の児はテキストに支えられ
テキストにない世渡りを肌で知り
卓上を辞退の金がゆきもどり

姉さんのことばかり訊く変な人
うしろから強く抱かれて見たい宵
肩吊つて強い意気地で女生き
風と来て姉をさらっていったひと
ついでに強い時は花札にも強い
卒業式さばらしい香が匂い
新卒は新卒らしい香が匂い
なにもかも中央に建ち小役人
中央の指示ですからと小役人
何ぞあったか度々姉の里帰り
一滴の流れはやがて強くなる
ふところの財布が言わせている強気
中央に座つて波紋の外にいる
強い意志 弱点つかれた未亡人
姉の意地 近い弟へ負けていず
母がわりの姉にはすまぬ角隠し
ついて来い強い一言聞きたくて
強くまた涙にもろく母は生き

むらくも川柳会
小砂
白汀報
雄由生
鎮彦
修史
一三
岳人
克美
喜風
吸江
瓢々
酔々
痴亭
鬼松園遊
史好報
滋正君儀柳古好好千静美凡
雀彰風子一志方一郎梢歩いき九郎

雑念にふけり深夜も眠れず
残り火となつて雑念消えかねる
雑念と人は笑うが親ごころ
雑念を去つた積木は高くなり
不況の風官庁だけはよけて吹き
卒業へ就職難がふりかかり
卒業の答辭涙にかけた声
廃校となる卒業へ花が散り
雑念を墓前に捨てて朝の霜
一管の尺八雑念捨てた音
雑念を地蔵にあづけた昼の月
スカートをずんずん長くする不況
素晴らしい雑念いまだ胸に燃え
卒業の写真へ豆粒ほどの吾れ

入試へ襲にもすがる神だのみ
口笛を吹いて明日の暮しを考える
背広着る我が子に半分はつとする
着飾つた女の胸に業を秘め
肚割つて茶漬けがうまい友の家
肝意地を通して皆かみ疎め
飯炊きに孕ませたま飯場閉め
親切が身に沁む老いの境に入り
排気ガス一杯受けて追い越され
新幹線九州弁が席を占め
日本語で云えと詛りをたしなめる
この土に生きて詛りを気にして
耐えてきた土は緑の春を生み
庭下駄で春の浅さを知る素足
うきじいとの動かず春の水ぬるむ
甲子園夢に見た土いまだ眠り
早春の夢見てつくしまで眠り
春の土雑草じわり根をはるか

京都塔の会
松川
杜的報
福敏
湖忠
蓮露
登美也
祥月
明華
孝子
一子
文子
秀子
英子
白汀
德松
季贊
漁人
洛醉
重二
誓人
本棒
雅果
眉峰
秀水
六竜
笑風
凡々
胡蝶
吞步
喜利
道子
与志
京塔の会

飛石に濡れる春光踏んでゆく
しばれると挨拶されて旅つづく
シグナルがくらしの中に多すぎる
リアス式雲が冬の陽を出し隠し
巡礼のこの峠で春に会い
だんだんと視野を広げて愛終る
無精ひげ剃った髪分ではらを吹く
ものたらぬ折りから屋台繁盛し
ブライドがあるから折り目だけつける
離人形わが家に欲しい男の子
蟹の洗いは弾けて純白な冬の花
人形は知ってた鍵のある日誌

他所目には気楽に見えて火の車
気楽そうに見えてもわびしい一人者
お得意の苦情素直に聞いておき
隣りから電話で怒鳴り込む苦情
親戚も不幸も政治への苦情
親切な傘で半分濡れている
蛇の目傘往き交う街の三昧の音
傘返しそこねてからの疎遠なり
ピンク着て小さな春を迎えてる
桐下駄をはいて世間に拗ねてます
春の猫声を枯らして帰って来

川柳たましま 稲田 豊作報
残念な顔がゆるんでからかわれ
酔うたふり狂うたふりもして男
カウンタータ長もカレの券を買う
幕閉じるまでの独楽です休まれず
感激の日付けが続く日記帖
蹴り飛ばす心の足に尾を振られ
腕組みを解き残念を口にせず
もう二度と来ぬ石段を数えてる
午後二時の女が待つるカウンター
くどくどと言う訛言に腹を立て

笛友 誠史 求芽 明賛 耕三 善信 飛断 水鳥 杜的 武助報 千代 加芳 仙夫 露栄 春助 武光 幸代 操子 豊作報 朝二 朝二 三幸堂 流風 誠草 澄子 林鶴 筒子

足に灸すえてまだ見ぬ富士の山
はつきりと気づけば残念壺の蛸
残念でしたねえと抽簾場のあいそ
庇い合う手と足がある遠い道
割網の恋を見ているカウンター
金網が要る窓口に花を活け
反省をせよと静かに夜の幕

駒つなぎ (大阪市) 岸
失業の日から朝寝の癖がつき
それほどのやり手と知らず金を貸し
町内のゴトゴト丸くするやうに手
仕合わせはやり手の妻が惚れて居り
手作りの味に故郷の母しのび
手作りのみそが上手な後家暮らし
調教の仕上げムチはばからず
手作りの味と言うてもインスタント
家中で借農園のいもの味
手づくりの良さをさわって感じとり
手づくりのパンが嬉れしい誕生日
手づくりの湯呑みの温み手にやさし
本当かうそか手打ちと書いてあり
手作りのおもちゃを作る子がおらず
手づくりの棚を女房は危なかり
こけしの名人人口が下手でよし
のみ一丁睨みをきかず獅子頭
国宝にされて手づくり陽の目みず
手づくりの漆の蒔絵盛り出し

オーエスケー川柳会 大坂
着ていてもしっくりと来ぬ貸衣裳
いつまでも當のままの適齡期
親父も彼岸に先祖の仲に入り
ご先祖は爪先に灯で歳を建て
ご先祖は雷のままで夢破れ
尻尾だけが衣着ているような海老

南柳報 隆正 喜柳 南喜 義柳 石彦 鎮彦 規一 肖二 綾女 育義 信天 恒路 小松 柳信 小園 形水 博泉 健坊 千上 駒夢 正人

ニューファッション着てきこたへ家を出る
大輪を咲かす蕾で国を出る
物理的に証明されぬのが先祖
勇断を迫る先祖の血が騒ぐ
海老いもで京都の冬をかみしめる
一着で冠婚葬祭兼ねる服
御先祖に近江源氏と云う素顔

川柳たけはら 森井 善居報
安いか卵を生むなとも言えず
絵具溶く子等に消えない虹の橋
逆らわぬ人で深さがわからない
久しぶり母子でたべるそばの味
野心あふれて名もなき人の絵画展
心の傷貴方に見せまいとする
泣くすべをおぼえたまいる目が甘え
扶助料を羨み苦勞には触れず
同病昇天ころに霜の降るごとし
口紅を落して主婦の顔になり

佳句地10選 (前月号から)

「川柳後菜」

浜田久米雄選

又夜が明けて私を追いたて
二次会は逃げるつもりで靴をはく
初春の海だ吸いが捨てまいぞ
ひとことでない恍惚の本を読み
手応えもない神様を信じ切り
引越しの数はど世しておらず
神に手を合す心に悪がない
生きる為この屈辱も耐えしのび
足あとを残したい身の軽すぎて
左遷とはこんな山道歩かされ

とよ子 千夢 鬼焼 八陣 佐加恵 窓花 北海 義雄

常一 聖夢 亜成 緑水 入形 仙水 松焼 鬼水 房幸 笑子 凡女 不朽 そのみ

原点に戻る家裁で手を握り
それからは目ざとい兎になりました
世話好きの妻紋付の日がつづき
同じ紋やと紋付よく借られ
因習の中で紋付くたびれる
幸いって紋風呂敷へ包み込む
紋付が栄枯盛衰知っている
紋付に出世して立つ故郷の駅
崩さないボーズ船場の香を残す
青年のボーズは上を向きたがる
シャッターへ強いボーズが崩れない
善人のボーズで神に手を合わせ
ハワイ川柳ウイロー社 林 蒼蛇樓報

いたずらで困りまわるとうれしそう
困惑の果てを捨て身の体当たり
困窮へやさしくひびく母の声
せめられて返事に困る過去がある
困らせた子が今我が家の柱なり
困難を乗り越えて来て今の幸
やりくりを上手に困るふり見せず
困っている父とは知らず無心書き
困ってもノ！と言えない義理があり
出来過ぎた姑に困る嫁の世話
催促の返事に困る電話口
明日期限金の工面がまたつかず
困っても色にも出さぬ太腹
口癖は困る困るで見栄を張り
困っても病母の看護はあいそよく
藪口へ出るにうれずそとと逃げ
年老って困るは愚痴の多いこと
困ったと縫られ一肌ぬいで出る
人情は困った時の神だのみ
情こめて誘えば困ると下を向く
虹川柳倶楽部（唐津市）
同天子報
廣 坊

舞の手に散る花びらがいとしようて
煙突が団地全部を買う値段
あやまちには夜来の雨に洗われず
候補者は花見の酔漢とも握手
徒然に想うことあり花の道
千人風呂女意外によい度胸
新築の蔭で借金耐えており
盃が社長代理の花見かなし
花見酒客の座敷へ酔いしれ
南海電鉄川柳会（大阪市）
辻圭水報
団結の声高らかな社歌と大なり
社歌出来た頃は明治の良き時代
社歌唄う幹事は派手な声になり
とさんんの社歌をわが宅につぐ入社
子供まで社歌が社運に釣り合わず
豪勢な社歌が社運に釣り合わず
嘱託として高らかに歌う社歌
社歌決めた頃の社員は社に殉じ
社歌のメロディーで幕があく演芸会
美しき社歌に捧取の文字並ぶ
赤旗を振った崇りか失業者
三井が丘川柳会 高田 博泉報
妻だけが知ってる隣のスキヤンダル
嫁探し廻り知ってとなりの娘
葬式に真価を発揮となりぐみ
五雨雨に隣と話す窓と窓
テスラから開放されて生きた顔
隣へ座ったがそもその成り行きで
ざわざわと隣に選挙事務所他派
越してきた隣へ他人の声を出す
当らないバットを提げた野球好き
息子は投手ブラウ管に折る母
空振りが許されている始球式
隣まで電子レンジが攻めてくる

勝 光一
志 実
簡 井男
照 沖
久 隆
烟 中
回 天
鎮 彦
圭 水
宏 賛
柳 信
儀 二
肖 二
誓 二
十 庵
川 狂
草 枝
初 郎
三 郎
重 子
重 泉
章 成
一 扇
世 山
亜 女
薫 鈍
風

△川柳展望▽発刊記念句会

日時 昭和50年6月22日（日）10時開場
場所 姫路市北条まき食品会館4F
（新幹線姫路駅南出口を左へ徒歩10分）

兼題 各題2句

「一匹」 天根 夢草選
「勇気」 森中恵美子選
「微笑」 橋高 薫風選
「絵笑」 寺尾 俊平選
「オルガン」 田中 好啓選
「鍵」 伊東 静夢選
「北川絢一朗選」

席題なし 投句は辞退させて頂きます。
出句締切 11時40分 開会13時
10分間のお話 「新子語る」

森 三子、羽淵礼子、墨作二郎
丸山弓削平、岸本吟一氏ほか

会費 1500円
（昼食、記念品、句会報呈）
賞品 各題秀吟に呈
参加申込 6月10日までに出席を左記へ
申込先 〒670姫路市阿保甲五〇二ノ一
前田美巳代方 TEL 0297

なお、句会終了後16時17時30分頃まで雑談会を開く予定にしています、ご意見抱負などお聞かせ下さい
記念句会世話係
前田美巳代、羽淵礼子、戸田啓古
橋本 石童、中尾藻介、定金冬二

暑中広告受付!

本誌五分の一段が二千円
グループをおもちの方も、
ご利用ください。

★原稿締切・六月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が四百円

川柳塔社

振替口座大阪

三三三六八番

▼二賞発表と同人総会は10月5日(日)の予定

(会場未定)

▼本社への不急のご用件は、なるべく書面をお願いいたし

ます。午前中と夕刻以後のお電話は06-7718-32

18(不二田宅)へ。(同人名簿の本社局番は271)

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選

集 水煙抄(10句) 菊沢小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「氷」 山根白星 選

「夏休み」 小西雄々 選

「観光」 白井三林坊 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選

水煙抄(10句) 菊沢小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「避難」 和田維久子 選

「年寄り」 藤井明朗 選

「捨て猫」 大西八歩 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

本社六月句会

日時 六月六日(金)午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622-1275番

(今月の出題・児島与呂志)

兼題 柳話

「育てる」

「骨旗組」

「苦」

席題 二題 当日発表

★投句だけの方は切手百円封入

橘 阿山竹若 本多志
高部素郎 選
薫柳太郎 選
風太選

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

8月の兼題 車窓稿 秀才 黒

規定はお守りください

定価三百円(送料十六円)

半年分 千八百五十円(送料八円)
一年分 三千六百円(送料一六円)

昭和五十年五月二十五日印刷
昭和五十年六月一日発行

大阪市内南区鰻谷中之町二〇番地

編集人 中島蓬太郎

発行所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪市内南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

ほくと6月

★偶数月はあまり好きではない。とくに六月は一年中で一番イヤな月である。なぜ六月が嫌いなのかという、何かヘマをやらかすと、それが決まって六月というケースが多い。昨年六月号で大失敗をしている。「暑中広

告」は昨年一月号から一四四頁にしてもらっているのに、その前年の11月号の「三百円」のをすっかり貼りつけて印刷所

へまわしてしまった。皆さんには少し儲けて？もらったが、社としては一万円以上損をしたことになる。

云いわけ

★当時「同人句集」を七月七日までに本にするため必死だった。定期刊行の本誌と二つ抱えて文字どおり四カ月間は無休だった。だいたいぼくのような仕事をしている者には、もっともつと遊べる時間がないと、いい仕事ができないのである。それについて今東光先生からうかがった次ぎの

葉子コーナー

▼子供の頃、十勝峠に鈴蘭狩りに行ったのを思い出します。小高い山を幾つか越すと、どこからともなく甘い香りがします。一面の鈴蘭の中ばかりおりますと香りが麻痺します。で、少しはなれたところでお食事をしました。

ような話がある。

時間は眠っていない

★今東光先生がある日、朝食前にトイレへ行き、すましてから椽側立って、ぼんやり庭を見ている時、何かがひらめいて、それを頭の中へ原稿用紙へペンを走らせていた。それが小一時間もつづいたので、奥さんが「ご飯もおつゆもかきまじまじしますよ」と声をかけた。ここで今先生の頭の中のペンが止まってしまったのである。「彼女は作家の妻としては落第だナ」と云われたことを今おもしろい出している。さて、ぼくの場合

も、頭の労働者の端くれとして、身勝手な話になるが、ボンヤリする時間がほしいのである。そんな時間こそ、ヘマをやる防波堤になるのだ。

偶数月と不仲の原因

★他愛のない話だが、偶数月には大相撲の放映がないから、その半カ月間、たのしみがないことになる。その点、奇数月は可愛い。

父子二代の相撲ファン

★一度ここで書いたことがあるが、ぼくのおヤジは相撲と女で家をつぶしたほど

の角狂だった。だからぼくも幼年時代から大相撲を見に行つたし「昇り富士」というショコタで幼年相撲の大関でもあった。

★22代横綱太刀山峰右衛門が19代横綱常陸山谷右衛門(初代出羽ノ海)の養子、小常陸(関脇)に怪我をさせ、それがため廃業した恨みからか、太刀山が後年東関として年寄りがなれた時、検査役どころが浅敷部長にもなれぬ無役だった。無念の涙をのんで引退したが、幕下時代の弟子の太刀光(大関)と若太刀に囲まれた写真が「武俠世界」に載っていた。出羽ノ海の横暴？がつづいたが、26代の大錦卯一郎や27代の栃木山守也(現春日野の師匠)のファンだった。大阪相撲の28代大錦大五郎や29代宮城山福松の華麗な土俵入りはまだ目の底に残っている。

ユーモア川柳の教科書

★笑いを育てて50年、秋田実先生の近著「私は漫才作家」が文芸春秋社から出た。川柳にユーモアをという人々への必読の書である。全国有名書店で好評発売中である。(不二田一三夫)

純良医薬

第一製薬

うちみ・肩こりに

ペタンと貼るだけ!

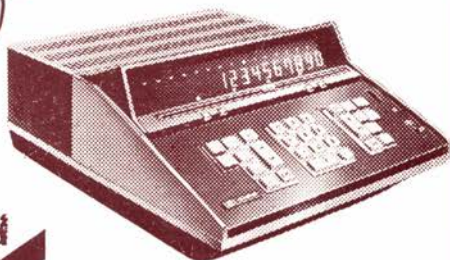
《新型バップ剤》

パテックス



● 140mm × 100mm 厚 3mm 3枚入

タッチでえらべば
やっぱりサコム

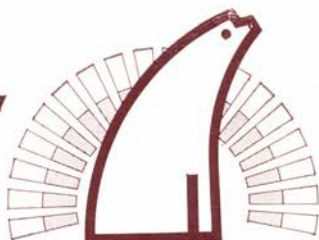


サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサブレス・√%キー付き
16けた2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社



HORAI



蓬萊商品の目印

アイスクャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



大 阪・なんば

《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

